

『命が危ない 311人詩集』

——いま共にふみだすために——

出版記念会

日時 二〇一一年十一月十二日(土) 午後一時三十分～六時
場所 東洋大学白山キャンパス三号館三三〇一教室
参加人数 四十六名
主催 コールサック社

〈プログラム〉

司会 佐相憲一(アンソロジー編者)

開会の言葉(主催者挨拶) 鈴木比佐雄(コールサック社代表)

第一部 記念講演

1 いま、いのちを考える 中村純

2 東北から思うこと 原田勇男

第二部 スピーチと詩の朗読

下村和子、木島章、浅見洋子、朝倉宏哉、山本衛、

星乃真呂夢、井上優、日高のぼる、酒木裕次郎、

たけうちよつこ、尾内達也、結城文、モーレンキャンプふゆこ、

鈴木文字、山田よう、中園直樹、平井達也

踊り 郡山直

佐相憲一(司会) ご来場の皆さん、今日はお忙しいところを本当にありがとうございます。『命が危ない 311人詩集』、皆さんのご協力で、思いのつまったものができました。その出版記念会ということで、どうぞ最後までよろしく願っています。私はこのアンソロジーの編者でもあります佐相憲一です。よろしく願っています。

では、さっそく始めたいと思います。最初に、コールサック社代表の鈴木比佐雄さんよりご挨拶です。

〈開会の言葉(主催者挨拶)〉

鈴木比佐雄 コールサック社の鈴木比佐雄です。今日は、一番遠くからは四国四万十の山本衛さん、金沢のうおずみ千尋さん、秋田のぼうずみ愛さん、新潟の清水マサさん、大阪の下村和子さん、福島のわたなべえいこさんをはじめ、朝早くから何時間もかけていらっしゃって、皆さん、本当にどうもありがとうございます。コールサック社は各地方の優れた詩人を世に出したいなと思いついてやってきたんですけれども、少し手ごたえがでてきたかなと感じています。

今回の『命が危ない 311人詩集』はどうやってできたかと言いますと、コールサック社は二〇〇六年に設立したんですけれども、二〇〇七年に『原爆詩一八一人集』というのをつくりまして、それは十年くらい構想したものでした。その中で、原爆以外にも空襲・空爆を書いた詩があるのをまとめようとしたい、二〇〇九年に『大空襲三一〇人詩集』に結実しました。柿

本人麻呂などの挽歌からさまざまな鎮魂の詩があり、それらをまとめて二〇一〇年には『鎮魂詩四〇四人集』をつくりました。私は詩論でそういうことも書いていまして、これでそれがある程度実現したんじゃないかなと二〇一〇年に思いました。そして、今度は、命が軽視されている中で希望を語るようなものをつくりたいなと思ったんですけれども、それをつくるのは若い詩人たちに任せたいなと思いました。『鎮魂詩四〇四人集』の時に佐相憲一さんが入ってくれたので、今度は佐相さんを中心に、中村純さん、宇宿一成さん、デザインーでもある亜久津歩さん、といった人たちに任せました。「命が危ない」という

「危ない」を加えたネーミングをしたのは佐相さんです。サブタイトル「いま共にふみだすために」は、私と佐相さんと亜久津さんで話しあって決めました。そして、始めました。当初は『命が危ない 200人詩集』だったんですが、その編集をしてもうほぼ集まりかけている頃に、三月十一日になりました、そこで私は、納期を遅らせても拡大して、東日本大震災・津波や原発のことなどを書いた詩も入れることを提案しまして、いまある『命が危ない 311人詩集』になりました。今の時代にふさわしい詩集になったんじゃないかなと思います。今の時代のさまざまな苦しみなどから人間が格闘して、その中から希望をもってこれから時代をつくっていくような、そういう詩集になったんじゃないかなと感じています。デザインに関しては、私はひまわりがいいんじゃないかなと伝えまして、亜久津さんがこういうデザインをして、杉山静香さんが実際にこの絵を描きました。ということで、コールサック社の本づくりというの

は社内が良い本を作ろうと知恵を出し合い、手作業ですすめるのですけれども、これからもこのように優れた本づくりを目指したいこうと思っています。

来年は『脱原発・自然エネルギー詩集』をつくりたいなと考えています。今の時代は科学文明に偏り過ぎてしまつて、その弊害が一番ひどいところに来たんじゃないかと思うんですよね。自分たちはそういう科学技術を受受してきたんですけれども、これでいいのかということもありまして、原発をただ批判するだけじゃなくて、自分の問題として、自然エネルギーや自然再生のために何か自分の生き方をこめて書いてほしいなと思っています。人数をしぼって二百人くらいにして、海外もドイツとかスイスとかイタリアとか脱原発を考えている国の詩人の作品もいれながら、英語訳も同時につけたものにします。だんだんはつきりしてきたことがあります。原爆、空襲、鎮魂、そういうものはある程度存在していて、日本の詩人が得意なものだった気がするんです。でも、今回の命だとか次の脱原発とかこういうものは、世界中に発信していくというか、世界が求めているものを日本の詩人たちが書くというか、レベルが違ってきたんじゃないかと思うんです。世界の人たちが見つめていて、外から日本の詩人が見つめられている、そんな意識で書いていただければと思います。世界の人が読むんじゃないかと思えますので、今日この場にも翻訳をしてくださる郡山直さんや結城文さんもらっちゃっていますし、選者には御庄博実さんにもなつていただこうと思います。御庄さんは広島の入市被曝者で、ずっと原爆詩を書いてこられて、医療のこともやられて

いるので、原爆と原発というつながりが分かっている方ですし、我々の原爆詩運動の中心人物です。また、『福島原発難民』を出した若松丈太郎さん、女川原発について書いてきた矢口以文さん、それに今日来られていて原発作業員の悲劇のことをもう三十年も書かれてきた鈴木文子さん、あとは私と佐相さん、という編者です。こういう方向ですすめたいと考えています。

皆さんにはいつも協力していただいて本当にありがとうございます。我々がこういうことを構想しても、信じていただけなければ何も実現しないので、まだまだこれからもやることはあるんじゃないかということでもこれからもやっていきますので、今後ともよろしく願います。本日はお忙しいところをどうもありがとうございます。

(拍手)

〈第一部 記念講演〉

佐相憲一（司会）ありがとうございます。本日はここに来場されている方おひとりおひとりとお話をさせていただいたり朗読していただいたりしたいですし、せっかくですから全員出演にしようかと考えたんですが、それではいつまで経っても終わらなくなっちゃうので、このプログラムに書いてある方々だけになりますけれども、お許しください。皆さんに感謝しております。

雄さんが、編者として受け取らせていただいたのが、このアンソロジーです。

巻頭に置かれた高良留美子さんの詩は、私たちの日常の隣に原子力発電所ができて、カタストロフィーが起こる未来に警鐘を鳴らしています。「産む」という一九八三年の詩です。

かつては産小屋を出る日

日本海の夜明けのなぎさで

波をかぶり 波をくぐった

死の世界から 甦るために

女はそうやって産み

産みつづけてきたのに その産道は

ついに原子力発電所までつづいていたのか

道の行方を見極めてこなかったために

道は産む者と産まれる者を分かち

人は日暮れた道を一人たどらねばならない

このいのちの始源が、産道がついに原子力発電所まで続いている。そして、私たちの子どもたちは被曝した。それが「今」です。

実は私は今年、諸事情あり職場を休職しております。それで、この震災原発事故に、三歳の幼児を抱えた子育てをする母として、ほとんどすべての時間を使って向き合うような日々を送ってきました。いのちを守りたい、その強い思いを形にすることで、自身も回復させようとしています。

さて、記念講演に移ります。中村純さんと原田勇男さんにお話をいただきます。

まず、中村純さんです。今回は編者に加わっていただきました。子育てをされながら、原発のことに敏感に主婦たちと市民運動にも関わっておられます。今、幼い子どもをかかえるお母さんとして、また詩人として、命をどのようにとらえているか、という観点で話していただきます。よろしく願います。

記念講演①

中村純「いま、いのちを考える」

こんにちは。中村純です。「いま、いのちを考える」、というタイトルの問いかけを佐相さんよりいただきました。その宿題をここでそのまま提出します。「今」、私たちはどんな今を生きているのでしょうか。

三月十一日で、世界は変わりました。私もみなさんの中にも大きな変化があったことと思います。

このアンソロジーには、静かに真実を見つけてきた詩人たちのことばがあります。詩人たちは、三月十一日前から、いのちが危険にさらされている時代を静かに凝視しています。生活者としても詩人としても、大先輩の詩人たちから新しい書き手たちまでの詩を、六〇年代から八〇年代生まれの、宇宿一成さん、佐相憲一さん、私、亜久津歩さんと、年上世代の鈴木比佐

東京の土壤汚染も、チェルノブイリのときのキエフ以上と言われています。東京の土壤調査（放射能防衛プロジェクトによる）の平均値は六〇〇ベクレル毎キログラム。これに六五をかけると、平米あたりのセシウムの値がです。この値は、放射線管理区域、つまりほこりを立てないように歩き、マスクをし、放射能に十分に気をつけて生きていくことのできる地域ということです。

この調査によると、首都圏の多くは、放射線管理区域の値、ホットスポットと呼ばれる松戸、柏、三郷、江東など、東京東部や東葛エリアなどは、権利移住区域という土壤汚染が、明らかにされています。政府もマスメディアもそれを伝えません。親たちはインターネット、フェイスブック、ツイッターなどのソーシャルメディアを駆使して、わが子を守るための情報収集をしています。私も含め、東北関東の各自自治体の親たちの会が各地に立ち上がり、給食の安全や放射線量測定や、除染など、子どもの生活環境を整えるため、行政交渉をし続けています。

日本は、放射線量が高く土壤の汚染された地域に、原発事故後九か月以上、人を住ませ続けています。実に、前掲の土壤調査で明らかになっただけでも、宮城から浜松まで、東北から関東の全域を超えるエリアで、土壤が汚染されています。これは、主に三月の爆発後のフォールアウトが原因です。原子力保安院の発表ですら、原爆一六九個分の放射能が環境に放出されたのです。その多くは海に流れたといわれていますが、子どものころに理科で習ったように、海から蒸発した水は、雨となって大地に降り注ぎます。地元の東京港区で行政交渉をして、セシウ

ムが検出された砂場を、原発事故以前の汚染されていない砂に入れ替えてもらったのですが、二か月たったら、再びセシウムが検出されました。つまり、環境中に、放射能が循環していて、除染をしても、除染をしても、再び土壌は汚染され続けるのです。

日本の食品の暫定基準値は、セシウムが500ベクレルで流通します。ドイツは子どもや青少年は4ベクレルで規制しています。ペラルーシですら三七ベクレルです。海外の多くで輸入禁止になるエリアのものを、日本では子どもも食べ続けています。日本の食品の行政検査は、流通食材の0.1%にも満たない。検査は、かなり漏れています。規制値以上のものを食べてしまうのは、ロシアンルーレットの状態。これを放置している状況。人々が声をあげない状況。無関心な状況。知ろうとしない状況。私はひとりの母親として、怒りに震えています。本当は、子どもたちを避難させなくてはならない。低線量被曝が続く今の状況が、どんなことにつながるか、人類初めての経験。それなのに、放射能は目に見えないから、まるで原発事故などなかったかのように、玄海原発も再稼働されました。放射能の正しい情報を得ることを、「気にしすぎ」というレッテルをはり、排除していきます。食の安全を守ることは、「風評被害」という名のもとに、生産者と消費者の対立に導きます。瓦礫受け入れについても、被災地とその他のエリアの対立に導き、東電や為政者は、責任逃れをしている。為政者たちの常とう手段です。私たちは常に真実をとらえる姿勢を明け渡してはならない。

す。ダイバーたちが三陸の海に潜り、家族の写真や持ち物をひとつひとつ拾い集めるのを映像で見ました。彼らは、潜る詩人でした。私はダイバーの視点になりました。

何年もかけて作り出した畑の土は放射能で汚染された、作った作物は食べられない、仕事場であり、生活の場であった漁場を奪われ、漁を再開しようにも汚染されたしまった海。幾度も幾度もいのちの尊厳が踏みにじられるのを、私たちはどんなに傷ついても、目を逸らしてはいけません。この悲しみと怒りをなかつたことにはいけない。

掌の林檎 柴田 三吉

わたしは知ったのだった
雨に打たれて帰り
蛇口をひねって水を飲んだとき
それを知ったのだった
逃げる場所はないのだと
どこにもないのだと

それはどこまでも追いかけてくる
心のなか 大切にしまってきた欲びにも
まっすぐ浸透してくるだろう
光る雨 青白い風
目に見える 透明な

いのです。

そして、詩人としてことばに立ち止りたい。今、私は「瓦礫」ということばを使いました。今、瓦礫は「瓦礫受け入れ反対！」と使われています。私は、大声でそれを言えないまま躊躇しながら過ごしてきました。もちろん、放射能で汚染されたものは、汚染されていないエリアに拡散してはいけない。(ただし、行政発表を仮に信用するとして、宮城の瓦礫よりも東京の一般ごみの方が汚染度は高い。土壌調査でも、宮城と東京は同等か、東京がそれ以上です。そして関東の一般焼却炉でゴミを焼却することにより、ダイオキシン用に作られたバグフィルターからは、放射性物質が漏れていて、周辺地域では高線量がでているという調査をなさった方もいます。)

ただ私は、この「瓦礫」とは、いったいなんだったのか、忘れられない記事があります。たしか、5月ごろ、幼い娘の遺体を探すために、手の回らない行政の仕事が待ちきれず、重機の免許をとって、「瓦礫」の中を重機を操縦している母の記事を読んで泣きました。この「瓦礫」の中には、まだ見つからないのちがあつて、自分の息子のものかもしれないと、瓦礫の中の洋服の端を掴む母親がいて、この瓦礫は、破壊されたいとおしい生活の姿なんです。大事に持ち帰りたい断片…。

その頃、汚染水も大量に海に流されました。私はそのとき、海に沈んだままの、はじまったばかりの家族のことを思ったのです。乳を与える母、帰宅する若い父。赤ちゃんの素足。海の中でその家族が再会できることを願いました。さかさ雨の降る海の底で。ご遺体もあがらない、その海に汚染水を流したので

物質となつて

——むかしむかし、てのひらに腐ったりんごをのせて
暮らす人びとがいました。りんごのなかにはとても熱
い火の種が詰まっていました。種はうすい金属の皮を
じくじく溶かしていくのですが、大人たちは皮膚が焦
げるのもかまわず、じつとにぎりしめていました)

そんなお話を いつの日か
小さな食卓で語りはじめると子どもたち
そこにわたしはいないだろう
けれど わたしたちの掌には
ひとつずつ配られた
重い果実が

深夜 わたしは台所に立ち
蛇口をひねり 喉を開いて水を飲む
心を浸し かなしみを浸し
コップ一杯の汚れを
この世界から
拭い取るために

この重い果実を、しっかり受け取らなくてはならないのです。思うほどに、いろんなことがはつきりと断言できないのです。謙虚になるべきだと思います。福島の子どもたちは避難し

た方がよいでしょう。でも、その土、風景、ことばは、その家族をはぐくんだもので、生木を割くような苦しみがあるでしょう。だから当事者でない私は、見つめているのです。当事者でないと、あげられない声、選択できない声があるのです。ただ、子どもたちは選択ができません。そのことが私の心にかかって離れません。

原発事故も、津波も震災も、3・11ということばでなくて、もっと大きな時間の流れ、少なくとも戦後の高度成長の国家のありようという大きな流れで、とらえてしかるべきなのです。そういう意味で、今、過去の詩人たちの仕事に耳を澄ませば、先輩たちが、この原発事故も予言し、警鐘を鳴らし続けていたことに気付くのです。しかし、遅すぎた。私たちがもっと、先輩たちのメッセージを丁寧聴き取っていたら、そして行動していたら、このようなことにならなかったのでしょうか。(ここで、詩人は政治的な行動をすべきか、するべきでないか、という議論をしたいわけではありません。詩人とかそういうこと以前の存在として、ということです。)

そう思っていましたら、若松丈太郎さんは、「既視体験」という詩の中で、もっと世界的な視点で、今回の原発孤児を捉えていらつしゃいます。

原ノ町駅へ行ってみる。
施錠されてだれもない。

JR常磐線は幹線のはずなのに
久ノ浜駅と亘理駅のあいだ一一〇・六キロ区間は

ださい。時代を戦争や虐殺や格差に導いたのは、人々が「リーダシップ」と勘違いする、大声の独裁でした。イラク戦争のときに私は以下のようなことばを書き、女たちの非戦メッセージを集めました。

名もなき草の花のような人や、言葉をまだ持たない子どもたちの声なき声に耳を傾ける感性を、世界中の人が見につければ、世界は回復に向かう。

そして、今ここに死者たちの声を加えたい。海の底、「瓦礫」の中にねむる、ひとりひとりの死者たちの声に耳を澄まし、犠牲になった多くの方たちの尊厳に気づくとき、私たちには歩むべき姿が見えるような気がするのです。

今、私は休職中の一時的な対応として、東京と京都の二重生活を送っています。京大の近くに小さな家を借りて、そこに一時疎開の母子もときどき受け入れています。ストロンチウムの出るような土壌で、三歳の息子を遊ばせることができません。隠べいされていた東日本の汚染実態は、市民の手で次々と明らかになっていきます。真実を知ることが私たち詩人の本質だと思います。でも、その真実に押し潰されそうになり、自分や隣人の乳幼児を抱えて、右往左往しています。

雨は汚いから触ってはだめだよ、木の葉のたまったところで遊ぶのはやめようね、東京では私はそう息子に言わなくてはなりません。息子は、京都の川は遊んでいいの？ 葉っぱいじつていいの？ スーパーでは、このハム、関西の？ と訊きます。保育園の七夕の短冊には、覚えてたの字で「放射能がこない

開通するみこみがないという。
線路に降りてみる。

レールが赤錆びている。
赤錆びたレールのむこうになにがあるのだろう。

その先がみえない。

ブリヤビチで見た赤錆びたレール。

ビルケナウで見た赤錆びたレール。

*ブリヤビチ、チェルノブイリ原発の北二キロにあった町。
ビルケナウ、ポーランド南部の強制収容所があった町。

福島原発事故と、チェルノブイリの原発事故、そして、強制収容所は、赤錆びたレールでつながっている。人為的な大量虐殺、人権侵害…。

若松さんの「かなしみの土地」(今回の福島原発事故以前にチェルノブイリのことについて書かれた)を読むと、ここにあげられた福島の地名、双葉町。大熊町、富岡町、楢葉町、浪江町、広野町、川内村、都路村、葛尾村、尾高町、いわき市北部、原町市、これらは、この三月にテレビニュースで繰り返し聞いた地名が多く含まれています。まさに、今回の原発事故がおきたらどうなるか、予言し、警鐘を鳴らし続けていらした。若松さんは、3・11前から事故を繰り返していた福島原発を告発し続けてきた『福島原発難民』を出版された詩人です。若松さんの声に、私も含め全世界が耳を傾けていたら…。

本当のことは、決して大声では語られない…。思い出してく

ように」と願いを書く子どもがいます。このしんとした胸の中の空洞は、日暮れた道を一人たどった高良さんの詩の中の女の後姿を追っています。

その女たちの、母たちの行方知れずの孤独に、私は詩を寄せました。ちよつと読んでみます。詩を通常読まない母親たちに向けているので、できうる限りわかりやすいことばで書いています。

もしも私たちが渡り鳥なら――すべての母たちへ
中村純

裸の凜とした肢体で

私たちはただの母だ

裸の凜とした肢体で

私たちは君たちを産んだ君たちが産まれて

分娩室で裸の私たちの胸にのせられたとき

君たちは懸命に生きようと乳を吸おうとした

何もないことがあわせた

私たちは裸でも生きていかれる

素足のまま 歩いてゆける

もしも私たちが渡り鳥なら

何も持たず

安全な食べ物のあるところを目指して

君たちを育てられるところを目指して

今すぐにも飛び立てる

ただ母として

ただの裸のいのちとして

今私はただの母に戻りたい

君を産んだあの日

素足で世界に降り立って

世界と和解した夜

何度でも君を産みたいと願ったあの夜はだかの私

はだかの君

お金も家もしがらみも仕事も何もかも棄てて

もう一度君と生きることを考えて

君を連れてここから飛び立ちたい

そしてすべてがはじまる

動物だったら、渡り鳥だったら、とっくに子どもを連れて逃げているはずです。人間は、経済活動を中心に身動きがとれなくなっている。仕事や共同体のルールなどで、逃げることもできず、そこにとどまるのが生きるようになっていく。そこには故郷への思いもあり、簡単に否定することはできないことです。むしろ、引き裂かれるような思いで、自分から根こそぎ奪われたような故郷を思い、そこにとどまりたいと願うでしょう。それでも、私は、この「瓦礫」、死者たちのいる瓦礫、人々の破壊された生活のかけらの中から、子どもを連れてもう一度生きなおしたい。道の行方を誤ったあの日に戻って、もう一度。

新しい人たちに

中村純

あなたたちに詫びなければならぬ

素足で歩ける大地

思い切り倒れこめる雪原

せせらぎに飛沫をあげて歩く浅瀬の川

木漏れ日にふり仰ぐ森

色とりどりの落ち葉のプール

大地のエネルギーを蓄えた安全な作物

それらすべてを奪ってしまったことを

あなたたちに詫びなければならぬ

私たち大人の無知と無自覚と愚昧の結果

薄汚れた札束と引き換えに失われた日々

さらびやかな電飾の嘘

オール電化の指一本で回す生活

セシウム四百九十ベクレルのおしゃれなランチ

美しく盛り付けられた遺伝子組み換えのディナー

あなたたちに詫びなければならぬ

あなたの中の遺伝子が傷つき

あなたの体からはセシウムが検出され

あなたの甲状腺が腫れたこと

私たちにできることは

真実を探し続けること 伝え続けること

闘い続けること あなたたちを連れて逃げることに

ひとつひとつの野菜や肉や魚を選ぶ

私たち自身の手でくらしを紡ぎなおすこと

もう一度ははじめから やり直そう

海が汚れる前の 土が汚れる前の あの日

一番最初の あのとときから

じんるいが 間違えたあのととき

原子力発電所が 私たち女の胎内 いのちの源まで

まっすぐに 直進を始めた あのととき

高良さんの「産む」という詩、若松さん、そして、このアンソロジーに書かれているたくさんの方の詩人たち。

三月十一日より前に、私たちひとりひとりが、もっと先輩たちの詩を読み込んでいたら、世界は違ったでしょうか。詩のことは無力でしょうか。ただ、真実を見極めることはできると思っています。世界は変えられないでしょうか。子どもたちは救えないでしょうか。

私の詩での呼びかけに返答してくれた多くの母親たちがいます。嘘をつき、時代を煽動していくのは、声高な声だったことは、歴史が証明しています。今、詩のことは難解に自閉せずに、世界へ語りかけることを始めてはどうでしょうか。隣人への語りを通して。

私には、いくつかの風景が見えます。

日暮れた道をひとりたどった高良留美子さんの後姿。

敗戦後、朝鮮半島からひきあげて、朝鮮の人々の故郷を根こそぎ奪った日本を悔やみ続け、生き直しをしようと、孤独に道を拓き続けた森崎和江さん。

死者たちの声、犠牲になった人たちの見えない声を聴き続けた石川逸子さん。

津波のあとの奥尻を見詰め続けた麻生直子さん。

今回、脱原発の発言者としてもお忙しいにも関わらず、帯文をお引き受けくださった落合恵子さん。

戦争への道を許さない女たちの会で活動し、今度は脱原発を

目指す女たちの会の呼びかけ人となった吉武輝子さん。

そして、このアンソロジーに集まった、多くの詩人たち。

このアンソロジーの編集や解説は、私と同世代の佐相さんはじめ、チェルノブイリを子どもたちのころや若いころに経験した世代がかかわっています。この放射能に汚染された汚泥の中から、この重い掌の林檎のようなアンソロジーを受け止め、自身の歩みをはじめなくてはなりません。ひとりひとりの道筋は、自分で作っていかなくてはなりません。どうしてでしょう、連帯できる母親たちがいるのに、この孤独は、と思います。でも、深く生きる道筋は、おそらくそういうものなのだろう、と先輩の詩人たちの後姿を見て思います。詩人同士、母親同士でできることは、道をお互い照らしあうことです。

真実に目をこらしてきた先輩詩人たちへの未熟な返歌として、私のつたないはなしをここでひらかせていただきました。このアンソロジーの機会をいただきました、コールサツクの佐相さん、鈴木さんに感謝いたします。

(拍手)

佐相憲一(司会) 中村純さん、ありがとうございます。心に響くお話でした。聞いていたご来場の皆さんの様子からもそれがわかりました。やはりそれぞれの世代の人がそれぞれの時代背景をもちながら、それぞれ自分自身の実感を交流することで、私たちのひろいつながりも見えてくるのだと、中村さんのお話を聞いていて強く感じました。中村さん、ありがとうございます。

続きまして、被災地・宮城から来ていただきました原田勇男さんからお話をいただきます。現代詩の世界における原田さんの御活躍はすでにご存じの方が多いことと思います。今日は、そのようなベテラン詩人の原田さんに、「東北から思うこと」という観点でお話させていただきます。よろしくお願ひします。

記念講演②

原田勇男「東北から思うこと」

かに超えていると思った。前後左右に大きく揺れ、しかも静まるまで長い時間がかかった。関東大震災を体験した両親からの教えを忠実に守り、机の下に避難した。事務所はロッカーが倒れ、数々の事務用品が空中を飛んで床に落下した。しかし、建物と社員にケガはなかった。

携帯ラジオが5〜6メートルの津波が海岸に押し寄せるとアナウンスしていた。自宅に戻ってみると、賃貸マンションの外壁が一部崩れ落ちるなど損傷していた。玄関を開けると、洗面所では洗面化粧台の上の部分が床に落下、ダイニングキッチンでは食器その他の台所用品が床で碎け散っていた。リビングルーム兼書斎と和室では三つの大きな本棚が倒壊し、各部屋とも本が飛び出して散乱していた。壁の一部に穴が開いて風が吹き込んできた。その夜から停電と断水、食料難の毎日が続いた。

小さな懐中電灯一本の闇の中で、人間のくらしはこんなにも脆いものかということを知られた。携帯ラジオが壊れていたので、地震や津波の被害状況は不明だったが、どうしてこんなことが起こったのか、こんな私みたいな余計者が生き残っているのか、私には何ができるのかなど衝撃と無力感に苛まれた。外は雪がちらついて寒かった。厚手のセーターとズボン姿で寝床に入った。アルコールで体の内側から暖をとるしかなかった。

建物は震災後半年間、灰褐色の防災用テントで覆われ、外壁補修用の金属パイプで足場が組まれていた。仙台市に「り災証明書」の発行を依頼したところ、大規模半壊の判定が出た。震災の影響で勤務先の会社が倒産、失業状態が続いている。その意味では私も被災者だが、地震や津波で亡くなったり、行方不

今、私の手元に一冊の写真集がある。『みやぎの思い出写真集 海と風と町と 3・11津波で失われた宮城の風景』(発行者Ⅱみやぎの思い出写真集制作委員会、発行所Ⅱ南北社)。本年十月一日に刊行されたばかりだ。この写真集は三月十一日の東日本大震災で津波の被害に遭った宮城県十五市町の海岸エリアを取り上げ、公募した三、一九五点の写真の中から制作委員会を選んで編集したものである。写真集発行の収益金は宮城県に寄付される。

私はこの写真集を見た瞬間から涙がとまらなくなった。あまりにも美しく懐かしい写真ばかりが掲載されている。この永遠に失われた海辺の光景と人びとのくらし。私は多くの悲惨な被災地の現実を目の当たりにしているだけに、その喪失感がたまらなかった。東北から思うこと。それは完全に元通りにはならないとしても、なんとか早く復興して、この写真に匹敵するような素晴らしい自然と人びとのくらしを取り戻したいということだ。それが甚大な被害を受けた東北の人びとの切実な願いなのである。

崩壊した世界

東日本大震災が起きたとき、私は仙台市北部の事務所ですポーツ業界紙の編集に追われていた。一九七八年(昭和五十三)の宮城県沖地震(マグニチュード7.5)を体験しているが、今回の地震(マグニチュード9.0)は、それをはる

明になられた方、家を流され避難所でくらすしかなかった被災者の皆さんに比べれば、私の苦勞などは大したことではない。こんな私にもさまざまな方から食料や飲料などのお見舞いを賜り感謝している。

石巻市は私の本籍地である。亡き両親が妹夫婦と暮らしていた旧河南町で、合併後に石巻市へ組み込まれた。郡部の田園地帯なので津波の被害は免れたが、友人知人が住む石巻市は縁のある土地である。震災後十七日目の三月二十七日(日)、仙台―石巻間のJR仙石線が不通のため、仙台駅前からバスで石巻へ向かった。隣席の漁師と震災について話し合った。大きな荷物を抱えた彼は石巻市雄勝町出身で、避難している親族の所へ行くという。約二十人が共同で避難生活を送っている。

彼は伯母を亡くしたほか、海沿いの石巻市商浜町では親戚の一家五人が行方不明のままだ。「娘はききょうが二十歳の誕生日なんだ」と聞かされ、胸がつぶれる思いだった。私は石巻の旧北上川沿いを歩き、最も被害の大きい門脇町と南浜町を取材した。十五・五メートルの大津波とガスボンベの爆発による火災で、被災地し地獄絵図のようだった。風光明媚な日和山から壊滅した街と海を見た。そのときの模様を書いた詩「がれきのかなたで海は青く」を東日本大震災特集の「現代詩手帖」五月号に発表した。これが震災について書いた最初の作品になった。

旧北上川に近い商店街のど真ん中に漁船が居座っていた。その左手前にも漁船が流れ着いていた。津波の恐ろしいほどの力がその存在を誇示しているようだった。そのときの衝撃的な体験が詩「船が屋根を越えた日」(THROUGH THE W

IND」25号)を書く題材となった。石巻の友人知人の中にも身内が行方不明になったり、家が浸水したりなどの被害が出た。石巻は死者の数が最も多く、復旧への歩みはまだ遅い。電気、水道などのライフラインは復旧し、駅前の商店街は立ち直ったが、住宅の修復や移転の問題は進展せず、深刻な状況が続いている。

四月二日(土)、仙台市若林区荒浜の被災地を取材する。仙台唯一の海水浴場として親しまれた深沼海岸は、墓地のように荒涼としていた。海沿いの荒浜地区は廃墟と化していた。鉄筋コンクリート四階建ての荒浜小学校だけが残っていた。その体験を踏まえて詩「海の壁がしづきをあげて」(THROUGH THE WIND」25号、『命が危ない 311人詩集』収録)を書いた。

避難所から被災後初めて点検に訪れていた女先生によれば、地震発生後に生徒を連れて屋上に避難。海が巨大な黒い壁となって住宅地を襲う瞬間を目撃したという。この辺一体は海と貞山堀の美しい光景に恵まれた別天地だったが、震災後は跡形もなくすべてが流失してしまった。先生と生徒たちは翌日ヘリコプターで保護された。それだけが不幸中の幸いだった。現在、この地域は津波避難エリアIに指定されている。

野蒜、関上、気仙沼

七月三十日(土)、特別名勝として名高い松島に隣接する東松島市の野蒜海岸や洲崎浜、鳴瀬川と海沿いの野蒜新町地区、

南三陸町、東松島市、名取市の六市町の市街地建築制限が解除された。東松島市では復興を見据え、十一月一日付で大曲浜、野蒜地域の一部分一六三ヘクタールを復興推進地域に指定した。津波で家が流された住民の中には、自宅再建を計画する動きが出ている。この地域では建物の新築、改築などには建築許可が必要で市町を通じて申請することになっている。市の復興事業に支障がないかどうか事前に判断し、支障が出る可能性があれば相談に応じるとしている。野蒜新町で会った男性の場合はどうだろうか。ただし、資金は自己負担だから、復興への道筋はまだ厳しいものがある。

お盆の季節には名取市の関上地区を訪れた。海や周囲を見渡す日和山は小さな丘だが、今は卒塔婆が立ち並び食事する被災者の姿が多く見られた。この鎮魂の丘から周囲を見渡すと、住宅地は家の土台しか残っていない。がれきは集積所に集められ、小高い山になっている。ある住居跡には吊いの花とギターが備えられていた。夜になると廃墟と化した生協前の広場で鎮魂のキャンドルライトが灯された。泣きながら火を灯す中年の女性二人に会った。三女と弟の妻が津波に流され行方不明だという。ショックのため親族の高齢者が三人も亡くなった。関上中学校の前では千基余りの灯籠が作られ、名取川の河口から光の帯となって海へ流された。

九月二十九日(木)には気仙沼市鹿折地区や魚市場、冷凍会社がある潮見町に入った。市中心部から北東の鹿折地区は被害の大きかった所だ。十二メートルの津波が街を飲み込み、海岸から一・五キロ先の国道45号線まで押し寄せた。火災も発生し

大曲地区を取材した。仙台と石巻を結ぶJR仙石線は不通で、松島海岸へ矢本間は代行バスが走っていた。野蒜駅は二階のフロアが斜めに陥落し、改札口をふさいでいた。洲崎浜へ向かう道の両側にあった松林は津波によって壊滅していた。ここは松島の景勝地から少し離れているので「余景の松原」と呼ばれていた。伊達四代綱村が名づけたが、今は一面の荒れ地と化していた。

その昔、野蒜海岸の民宿に泊まり、夏を過ごしたことがあった。洲崎浜から松島よりの美しい海水浴場だったが、津波はすべてのものを奪い去った。洲崎浜と鳴瀬川河口沿いの野蒜新町地区は、浜と川の双方から津波に襲われ、二六〇世帯の人びとを飲み込んだ。家を流された初老の男性は毎日のように家屋跡へやってくる。「妻は海沿いの託児所に孫を迎えに行つて流された。おれは海岸から離れた小学校に行つてもう一人の孫と助かった」。男性は「これからどうしたらいいかわからない」と肩を落とした。

バスで矢本駅まで行き、徒歩で海へ向かった。横沼から大曲にかけての広大な稲田は雑草とがれきで覆われていた。大曲市民センターの道路脇で逆さまになった小さな漁船「第二竹丸」を見たむ船体には赤い色で「ガンバロー大曲」と書かれていた。その素朴な文字が胸を打つ。北上運河の大曲浜新橋を越えると、道路が陥没し前へ進めなかった。大曲浜の住宅地も壊滅状態だった。クレーン車の工事音のかなたから、津波で亡くなった人たちの声が聞こえるように思った。

新しい動きとしては宮城県内の石巻市、気仙沼市、女川町、

てJR大船渡線の鹿折唐桑駅一体は火の海と化し、二日間にわたつて燃え続けた。海岸寄りの大船渡線は不通。現地では大きな貨物船が津波に打ち上げられたままになっている。

気仙沼市はサンマの水揚げが日本一の水産都市だ。しかし、魚市場や漁協冷蔵庫や冷凍会社がある潮見町の臨港地区では、海水が浸水したままで荒廃した建物が放置されている。別の魚市場に魚は水揚げされているが、漁獲量を上げて冷凍施設が復活しなければ水産都市の復旧はない。市民の間からは漁業が復興しなければ立ち上がれないと不満の声が聞かれた。

市内には三十四カ所の冷凍工場があったという。十月三十一日になって、気仙沼市朝日町の冷蔵倉庫業のヨコレイ(横浜)の気仙沼冷凍工場が再開。震災後に初めて操業を開始した。鮮魚を凍結処理して全国に販売することだが可能になった。社だけではなく、もっと多くの冷凍業者の復活が待たれる。そのほか福島県のいわき市、岩手県の釜石市、宮古市にも足を伸ばした。どこもがれきの山が残り、復旧はあまり進んでいない。被災地では行政の支援の遅れを批判する声が多く聞かれ、生活不安を訴えている。これから東北は寂しい冬の季節を迎えなければならぬ。被災地の一層の公的救済が急務である。

時代の転換期に

私は宮城県に住んでいるが、同じ東北でも福島県の場合は状況が異なるのは言うまでもない。岩手県、宮城県と違って、福島県は地震、津波に加えて原発事故という恐ろしい災害が重

なっている。さらに風評被害が広がり、いわば四重苦の巨大複合災害の犠牲になっている。沿岸部の浜通り地域は津波で家が流されただけでなく、原発事故による避難指示により、家や土地を持った多くの住民がふるさとを追われている。

死者、行方不明者にとっても事態は深刻である。原発事故という人災によって放射能が撒き散らされ、立ち入り禁止の警戒地域では遺体の収容、行方不明者の捜索すらもできず、亡骸は放置されたままである。たまに一斉捜索が行われているようだが、短時間では十分な捜索活動は不可能である。この国ではかけがえない命が蔑ろにされている。自分の意志で死を選んだのではないのに、意図して行方不明になったわけではないのに、警戒地域内の海辺では汚泥の中で、行方不明の人びとも含めて遺体は朽ちていくのである。これはあまりにも酷い差別ではないか。

その原因となったのは福島第一原発による事故であり、原子力は安全であるとの架空の神話を広めて、原発政策を押し進めてきた政府による失政の結果である。私はかねてから原発には疑問を抱いてきた。チェルノブイリやスリーマイル島、その他の事故を知る度にその安全性に問題があると思っていた。今回の原発事故もそうであるように、原発は事故を起こしたら取り返しつかない事態を引き起こすのは目に見えている。一九九八年に日本で出版されたベラルーシの女流作家スベトラーナ・エレクシエービッチのインタビュー『チェルノブイリの祈り―未来の物語』（松本妙子・訳、岩波書店）という事故に遭遇した関係者の証言を読んで衝撃を受けたことがある。被

ばするほど、人間の方が反自然の牙を剥き出したのである。

今回の大震災によって、人間は改めて自然の脅威に気づかされたのではあるまいか。かつては自然を敬い、自然の恵みを享受することによって、日々のくらしを支えてきたのだが、現代では自然を克服したと錯覚して、自然にとっては理不尽な行為を繰り返してきたのだと思う。熱帯雨林の伐採や排気ガスの垂れ流しなど、人間自身が地球環境を悪化させ、その結果地球の気象変動を招く結果になっている。今回の震災は海底の異変によるものだが、しかしながら人間が自然を痛めつけてきたのは事実であり、自然を支配しようとした人間の香りと退廃ぶりは明らかである。

千年に一度の人間を越えた大震災を経験した私たちは、後世に真実を伝えるために生まれ変わらなければならないと思う。人間の思い上がった愚行から地球の生態系は危機に瀕しているが、これを機会に人間は自然に寄り添うかたちで再出発すべきである。自然と文明のバランスを取り戻す行為こそが、今人間に求められている最大の課題なのではないだろうか。人間の英知を結集して、今こそ新しい人間の第一歩を踏み出すべきときである。それによって私たちは限りある命を燃やして、鋭意努力する目標を達成することができるのだと思う。時代の転換期に際して、これが被災地の東北から発する提言である。

（拍手）

佐相憲一（司会） 原田勇男さん、ありがとうございました。

曝後十四日で死んだ消防士ワシリーの妻の悲しみに胸が決られる思いがした。事故処理作業をしていた新婚の夫を亡くして悲嘆にくれる妻ワレンチナの話も原発災害の恐怖を物語っていた。いつか日本でも原発事故が起きるかも知れないという潜在的な意識が心の奥にあったのだ。

その意味で、ことし出版された若松丈太郎氏の『福島原発難民 商相馬市・一詩人の警告』（コールサック社）を高く評価している。詩やエッセイを通して長い間危惧してきた原発事故の恐怖。それを警告してきた先見性と鋭い批判が現実になったことへの憤りを、私自身も抑えることができない。ヒロシマ、ナガサキに落とされた原子爆弾の被爆国である日本が平和利用の美辞麗句に隠れて、なぜ原子力産業にのめり込んで行ったのか、私には理解できない。その破綻の具体的な事例が今回の原発事故だと思う。そしていつも犠牲になるのは一般の民衆なのだ。福島第一原発事故の早期解決と県民がふるさとの市町村へ無事帰られることを望みたい。常に危険性を率む原発はいずれ廃止すべきだと思う。

東日本大震災の発生以来、なぜ自然は恐ろしい厄災をもたらしたのかという問いから逃れることができない。人間がこの地球上に現れて以来、あるときは自然を利用し、またあるときは自然に守られてきた。おびただしく誕生した動植物と同じように、人間もまた自然とともに生きてきたのである。しかしながら現代になって人間はテクノロジーの発達によって、生活の利便性や欲望の充足を追求する余り、とすれば自然に反する行為によって地球環境を破壊するようになった。文明が進歩すれ

大変鋭いお話をいただきましたが、中に出てきました写真集がこれですけども、これは震災前のあちらの風景が写っているんです。ある意味、「詩」のようなもので、ここがもう無くなっちゃったんだなあという痛切なものなんです。この写真集は五〇〇円で、収益はすべて宮城県に寄付されるということです。原田さん、ありがとうございました。

（休憩）

〈第二部 スピーチと詩の朗読〉

佐相憲一（司会） では、後半を始めたいと思います。その前にですね、今日は、先ほどお話をいただいた原田さんのほかに、二名の方々が東北からおみえです。ご紹介させていただきます。あちらがはるばる秋田から来てくださった、ぼうずみ愛さんです。（拍手）それから、こちらは福島からおみえになっていますわたなべえいさんです。（拍手）

では、スピーチと朗読、始めたいと思います。

今日新幹線で帰られるという、大阪からご参加の下村和子さんです。新鮮な詩集やエッセイ集を出されていますベタランの下村さん、よろしく願います。

下村和子 下村和子です。私は兵庫県の西宮というところに生まれました、海辺のまちだったんですけれども、海を眺めながら暮らしておりましたので、海が好きなんです。あちこちの

海を見てまいりました。その中でひとつ非常に印象に残っているのがサイパン島の海だったんですね。バンザイ・クリフといまして、たくさんの日本人が崖から飛び降りて亡くなられた場所です。その海の水がすぐきれいだっただけです。るり色という色なんですけれども、戦争の起こした悲劇、人間の起こした悲劇ですよね、そんな場所なのに、あんなにきれいな青になって甦っているなどということ、その場を立ち去り難かったのです。それで、今年三月十一日、あの事件は本当にショックでした。いろいろとあれから考え続けています。一刻も忘れられないくらい、私には大きなことでした。自然災害と人間の起こした災害の複合災害ですよね。あの時の海の色を思いました。とてもつらい色だろうなと思いました。それで、ふと浮かんだのがサイパン島のあのきれいな海の色だったんです。それを詩にしたのが、今回のアンソロジーの作品「瑠璃浄海」です。また、今回の震災への思いを一冊の詩集にまとめて先日出したのが『いろはにほへど』という詩集です。読んでいただけたらうれしいです。東北がいつかきれいに青くなることを祈っています。

瑠璃浄海 下村 和子

春浅い日 海は何千という命を沖遠くへ引摺っていった 三月十一日この世は誠の地獄となった 海も人も泣きながら遠くへ遠くへなだれていった 同じ地球の砂の国では人と人が

ああしかし 人はまた新しい毒をどくどくと流し始めた 夜の海の秘かに吠える鬼哭きの声が わたしには聞こえる

(拍手)

佐相憲一(司会) 下村和子さん、ありがとうございます。

続きまして、木島章さんです。最近コールサックに参加されてこられた方で、詩人会議や個人誌「エガリテ」などに書かれています。木島さん、よろしく願います。

木島章 木島章と申します。よろしく願います。お恥ずかしい話、今回の福島事故が起こるまで、私はそれほど意識して原発というものと向き合ってきませんでした。それまでも、政府や電力会社や御用学者などの言うことにはある種のうさんくささを感じてはいたんですけども、首都圏に住む私にとってはどうしても対岸の火事というのか、それほど意識せず生活を楽しんでいました。それが、ああいう事故が起こって、私には四歳の子どもがいるんですけども、次の世代、子どもたちの世代にまで及ぶということに至って初めて、胸が裂けた、そういう反省の繰り返しです。今考えれば、推進派の言っていた安全神話というものがいかに人の命、健康や幸せをないがしろにしてきたか、それよりも利潤ですとか利権というものをいかに優先してきたのか、腹立たしい思いが続いております。その中で、この『命が危ない』という本が出たことは大きな結晶

争い殺し合っていた ドストエフスキーは神なければ人は野獣に返ると言ったそうだが二十一世紀の今 神はどこへ行かれたのか

だがあの青 私が見たあの青は… 神なき星にあの輝く海があり得るのか サイパン島バンザイクリフの海は 清らかな藍を湛える極楽の池 白い花が舞っていた 嘗て数千人の日本人を呑み込んだ海が何故あのように穏やかに光っているのだろう 人は死ねば何になるのか 海はどんな魔法を使ったのか 寄せては返す眠くなるような平凡な波の動き 見ているのは人間の愚かな争いと相変らずの欲望

あの繰り返しの中で海もまた不満を貯えるのだろうか 一本気な水はその怒りをつのらせ怒号の龍になったのかもしれない 立ち上がった巨大龍 あの龍はサイパンで生まれたのかしら 津波の親は龍 自らのエネルギーをおさえられない海獣になってのたうちまわる 彼は苦しいのだ この世にあるものが全て持つ暗い自らの影 黒いパワー 自分を制することも出来なくなってしまう海の魔

一瞬の発散のために一生の苦役を課せられる海 呑みこんだ命を浄化浄仏させるために延々続く藍建ての仕事 海の青を再生する 一人の命が一粒の光の玉になる途続く地道な働き 海の藍が美しいのは呑みこまれた生命の輝き 太陽に暖められて瑠璃色に染め上げられていく命の水滴

になるのではないかと思っています。で、今まで傍観者であったことの言い訳ではないんですけれども、田尻宗昭という公害摘発に生涯を捧げた人が「社会を変えていくのは数ではない。一人です。二人です。三人です」という言葉を残しております。私のような「にわか原発」の者も、その中に続いている社会は変わるのではないか。そして、このアンソロジーもそういう民意を結集していくよすがとなるのではないかと思えます。

小さな包み 木島 章

私にはわかりません 後ろからついて来るものの正体が。

目に見えず匂いもないのに 背中を射抜くように 内臓の奥深く関節の隙間にまで忍びこみ 一生消えない恐怖をジワジワ育てていきます。

ある日のこと 家路を急いでいた私は 気がつくとき 小さな紙包みを握りしめていて 中身も知らないその包みが どうしてかキラキラ輝いて見えました。

はやく家に帰って包みを開けたいのに
誰かが背中を追って
いつまでもついてくるようで
走り出すことも後ろを振り向くこともできず
泣きそうになりながら歩き続けました。

もういいだろう
すっかり暗くなっていることに気がついて
立ち止っても、あたりは私ひとり
誰かの影だけがどんとと伸び。

影が自分をすっぽり包みこむと
握りしめた包みの口から
少しずつ漏れ出す
ヨウ素、セシウム、ストロンチウム、トリウム、キセノン、
クリプトン、プルトニウム……

この時からです
私が歩くそばから
草も木も花も、野菜も果物も
石も土も川も海も
そこに住む生き物さえも
すべて鉛の棺で覆わなければならなくなりました。

ます。この詩集のダイジェストとでも申しませうか、そのよ
うな形でこのアンソロジーに参加させていただいたのが今朗読
します作品でございます。お聞きください。

空襲孤児から震災孤児へ 浅見 洋子

二〇一一年三月一二日 午後一時三〇分
すみだ女性センターには
東北地震による 交通事情最悪な中
東京大空襲訴訟原告団 数人が足を運んで来た

テレビを見ていると
身体が震えて 震えて どうにもなりません
とくに 気仙沼の火災現場の映像は 苦しいです
涙があふれて あふれて……
「お母ちゃん お母ちゃん！」と小声で言っている
握り締めている両手には 脂汗がビッシヨリ
と話すのは 鹿嶋市から来た 吉田由美子六九歳

私たち 一日でもいいから
震災の人達のために 街頭に立って
支援のカンパを 集めませんか
私たちだから 何かをしなくっては……
と意を決した声が 第一会議室に響いた

それは、何十年前なのか昨日のことなのか
それとも二〇一一年三月一日の出来事だったのか
もう思い出すこともできずに
いまだ果てしない家路を逃げ惑っているだけ
そして、これからも。
つねに追いかけてくる誰かを背中に感じながら。

(拍手)

佐相憲一(司会) 木島章さん、ありがとうございます。ご
自分を「にわか反原発」とおっしゃいましたが、詩の内容は今
の多くの国民の気持ちを代弁しているようで、胸に迫ってくる
ものがありました。

続きまして、最近話題になっております詩集『独りぼっちの
人生』を出された浅見洋子さんです。いつもコールサククにご
協力いただいております。この詩集に克明に書かれていますよ
うに、東京大空襲の裁判に関わっておられて、戦争の被害者と
震災で被災された人たちは結びついているという観点で、アン
ソロジーにも大変いい詩を書かれています。浅見さん、よろし
くお願いします。

浅見洋子 浅見洋子でございます。実はこの詩集『独りぼっち
の人生』、おかげさまで、十二月二十八日の口頭弁論最終の証
拠として裁判所に提出されます。詩にもこういう役割があるの
だなと知った時、書くことの重さと責任を今すごく感じており

草野和子七五歳も また 東京大空襲で
両親と叔父家族五人を 亡くしていた

東日本大震災に遭った 方々に
私たちがだから 出来ることは と

思いを巡らしていた そして その思いは
「震災孤児の救済を求める訴え」として

東京大空襲被害者原告団
孤児被害者代表 金田茉莉によって
書かれ 公表され 衆参の議員室に配られた

—— 私たちは、六六年まえの戦争末期、空襲被害によって
孤児になった者です。私たちは空からの焼夷弾による火
の海を逃げまどい、親きょうだいが焼け死んでいきまし
た。

火を逃れて三月の隅田川に入り肉親が沈んでいきました。
黒焦げになり、身元も分からなくなった遺体の山と遺骨
の散乱する焼け野原をさまよいました。

私たちは、親を失った悲しさと心細さと、これからどう
したらいいのかという不安に押しつぶされていきました。

今回の震災の孤児の方たちは、六六年まえの私たちと
まったく一緒でした。私たちは、遠い昔の記憶のほずな
のに、今回の被害の様子を知り、あの頃の自分の恐ろし
さと不安を一挙に思い出しました。

本当に苦しいです。

—— 政府関係者の方々にお願いです。

どうか、孤児になった子どもさんたちを第一に救って下さい。どの被害者の方も大変なのは分かります。でも、親が居なくなるということは、子どもにとっては生きる基盤を失うことです。

悲しくても心からすがれる存在がなくなるということですから、今後、精神的な苦しみや物理的な不自由、有形無形の差別などにさらされていく可能性が大きいのです。

—— 震災から、三週間たち、子どもたちの心は、茫漠自失から本当の苦しみに入っていきます。私たち空襲被害孤児で「親と一緒に死ねばよかった」、こう思わなかった孤児はいません。今回の震災孤児たちにこんな思いはさせないで下さい。

どうか、孤児たちの生活支援、精神的な支援をまず、お願いします。

また、他国の被害の際におこったような、孤児の他国への連れ去りなどは、絶対にならないように留意していただきたく、心からお願います。

学童疎開をしていた 小学校三年の金田茉莉は

疎開先から帰省し 三月一〇日朝 上野駅に着いた

誰もいない駅 駅の外は 見渡す限りの 焼け野原

のイベントには欠かさず来てくださいまして、鳴海英吉研究会はもちろん、鈴木俊さんの訳されましたベアト・プレヒビュール小説のスイス大使館での記念会では乾杯の音頭もとってくださいました。日本現代詩人会の理事もされています。朝倉さん、よろしくお願います。

朝倉宏哉 朝倉宏哉と申します。今回の大震災で、詩人たちは多くの震災の詩を書きました。私もいくつか書きました。私は岩手の出身でございますので、とりわけ津波の方に関心があるわけですが、今回の大惨事では、ある意味、人間というのはいくつものだなど感じました。あの絶望の淵から立ち上がっていく被災地の方々のあの姿ですね。その中でも中学生、高校生をはじめとしてリーダーシップをとって、まさにこのアンソロジーのサブタイトルではありませんけれども、「いま共にふみだすために」頑張っている姿というものが強く印象に残っております。世の中には、詩を書かない詩人というのはたくさんいるんだなという思いがしてしまうのですが、被災地の方々、特に郷土芸能ですね、流されてしまった太鼓やら笛やら装束やらを拾い集め、あるいは修理してですね、復活させている方々があります。そして、ちょうど今年のお盆には亡くなった方々を供養・鎮魂することをですね、集落一致して行ったというのがございました。たとえば、陸前高田、広田、大槌とか。こないだの新聞にも報道されていましたけれども、大槌の長距離トラックの運転手の方はですね、大槌川の周りが見えなくなったと、そのがれきを片付けてですね、その河川

この空襲で家族を亡くし 独りぼっちの生活となった
親戚をたらい回しされ 労働のみを課せられた 毎日
早く母の処に逝きたい 病気で倒れて死ねば楽になる
と 過重な労働を 受け入れていた

六六年まえの 恐怖におびえながらも

一歩を踏み出した 六六年まえの孤児たち

いま 理想が 現実となる 奇跡を！

と 平和実現への 祈りもって

東日本の被災を 自分の被災と重ね

六六年の人生と 向き合っている

(拍手)

佐相憲一(司会) 浅見洋子さん、ありがとうございます。今お手元に配布されましたご案内、浅見さんの詩集からも朗読される「詩とお話の夕べ・東京大空襲・心を壊された子どもたち」は十一月二十六日ですので、よろしければご参加ください。浅見さんの関わっておられるこの訴訟、重要なのは、東京大空襲において、アメリカはもちろん悪いんですけども、日本は戦争を止められたんですよ。もっと早く戦争をやめていけば、東京大空襲もヒロシマもナガサキも遭わずに済んだんです。この裁判は、日本の政府を相手にたたかっておられます。大事なことだと思います。

さて、続きまして、朝倉宏哉さんです。いつもコールサック敷をならして、北海道の菜の花が忘れられず、そこを菜の花畑にしようと、片側一キロ、片側三百メートル、菜の花を植えられたそうです。もちろんそれにはボランティアの方々のご協力があったそうです。それから、やはり大槌町の佐々木さんという方はですね、その方の家は高台にあつて津波を免れたそうですけれども、自分の庭に電話ボックスをつくって、まちなかに開放して、思いのたけをその電話ボックスに来て話してほしいということをやったんですね。私がこれから朗読する詩は、その佐々木さんがつくった電話ボックスに寄せる詩です。

風の電話ボックス 朝倉 宏哉

三陸海岸の丘の上の白い電話ボックスには

いつもだれかが入っていて

受話器を握りしめている

津波から百日過ぎても

姿を見せないひとに

早く帰ってきてとせがんでいる

話しているのは若い女

老いた母 あどけない子供 初老の男 少年少女 爺さん婆

さん けがをした青年

瓦礫の山の向こうに

青い穏やかな海が見える

あの日の午後二時四十六分までと同じ海が見える

あの海のどこにいるのよ

かぎりない恵みを与えてくれた美しい海が
突然変身して襲いかかり

早春のリアス海岸の町や村を総毟めにして
愛するひとたちを攫い

一瞬のうちに何万何千のいのちを生と死に分けた

丘の上の白い電話ボックスから海が見えるから

海に向かって話しかける

黒い波に吞まれ 渦に巻かれ

なにかにしがみついて生き残ったひとが

漁師が 農民が 商人が 職人が 会社員が 主婦が 高校

生が 中学生が

死んだひとに

生きていることがこみあげてきて

死んでいることがこみあげてきて

初めての言葉で話しかける

三陸海岸の丘の上の白い電話ボックスには

電線がない

ダイヤルを回して受話器を当てて

風に乗せて

生きているひとと死んでいるひとの

果てしない通話がつづいている

*大震災後、岩手県大槌町の佐々木格さんは自宅の庭に

「風の電話ボックス」を設置して町民に開放している。

させてもらったというわけでございます。

四万十市の前身が中村と呼ばれていたのですけれども、中村のまちも地震で壊滅的な打撃を受けました。人口わずか三万人になるかならないかのまちがですね、昭和二十一年の十二月二十一日という忘れることのできない日にですね、敗戦後一年経っておりましてけれども、空襲でやられた後、地震でもう徹底的に痛めつけられました。今でも病院の奥様が燃え盛る炎の中で「助けて」という声が聴こえてのうという話がですね、いま市民にも、もうあれから七十年近く経っているんですけども、忘れられない思いが私どもにもあるわけです。あの頃は、まだ中村にも青年団というのがありまして、若人がこのまちを復興してくれました。懸命にやっても三年はかかるだろうというのをですね、わずか三カ月で、この中村周辺の青年団が何万というボランティアですね、いまのまちをつくりあげていったわけでございます。その地域の杖とも柱とも頼むような青年が、全部東京にとられ、大阪にとられていったのです。ですから、今地域には若者の「わ」の字もありません。最も若いのが七十八歳の私ぐらいでございます、そういうことでござい

ます。文明を考えます時に、私には電気の原因があります。忘れもしません、昭和十五年、この年はですね、皇紀二六〇〇年、今ごろ言う人はおりませんけれども、日独伊三国同盟というのが結ばれた年でございます。もう皆さんお生まれになつていない方ばかりでございますが、それを記念いたしましたして、我が家に電気がついたんです。小学校二年生の時でございます。

(拍手)

佐相憲一(司会) 朝倉宏哉さん、ありがとうございました。岩手県ご出身の朝倉さんは関東で詩を書かれながら、今も岩手の詩誌などにも参加されています。

次は、はるばる高知県から来ていただきました山本衛さんです。大ベテランで、中四国詩人会の会長さんです。よろしくお願ひします。

山本衛 あらためまして、山本衛と申します。四国は高知県の四万十市というところに住んでおります。東京で、「四国から来たつて言いますと、九州の向こうか」つて言う人がおる、それだけやっぱり知られていない。四国は九州よりも北になります。もうちよつとこの、文化都市に近い方になります。文化の問題になりますと、もう世界の最僻地ということになっております。東京までやって来るのに八時間かかります。ですから、今朝起きてから家を出たのでは間に合いませんから、昨日から来ております。準備は一週間前に、パンツを洗ったり、下着を入れたり、そういうことをしながらやってまいりました。三・一一の問題がどうにも頭にきたので、みんなで考えてみようじゃないかということで、まったく素朴な思いで、仲間の詩集に載せたものがです、まあ図らずもですね、このコールサックという大企業に見い出されまして、そうして鈴木さんからアンソロジーに参加せよという命題をいただいたものですから、出

我が集落は、もう昔から変わらない八十数戸の集落ですが、その集落の中でももうひとつ外れた岬のはずれにですね、我が山本一族の三軒が住んでいたんです。その三軒だけはあまりにも遠いために電気を引くことができないということだったんですね。ところが日独伊三国同盟ができてですね、お前も恩恵にあずかれということで、電気を引いてもらった。その時、我が家に、たった一個、電気をつけてくれたんですね。白い電球で、今で言う豆電球のような電球だったんですけども、今までランプの下で暮らしていたねえ、夜になったらはよ寝ようという暮らしをしておりましたけれど、もうあれが一晚中ついてくれただおかげですね、文明とはこんなにあるがたいものかと、それ以来私は猛烈に勉強を、ま、しませんでしたけれども、そのような電気の恩恵を受けたわけでございます。今、小さい我が家に二人つきりですね、なんとたくさんのこんなものが付いているんですね、何ともぜいたくやと自分の僻地でさえ思うんです。それから見ますとですね、東京はぜいたくです。もう夏冬なしに冷暖房がかかっているでしょ。ホテルでも、寒くないのにどんな暖房がかかっていますね、寝付かれないような、これほどのバカみたいな電気を使うから、東北をいじめてまで電力を使いたがるのか、という思いを強くいたしました。では、作品を朗読させていただきます。

ヒトは？——ゲンパツはゲンバク——

山本 衛

その日

真夏の太陽は滞りなく昇って
だれに分け隔てするはずもなく降り注ぎ始めていた
上空に一瞬奔る閃光！
吹きすさぶ突風

黒煙が全土を覆い

かつて地球上で見たことも聞いたこともない熱風に
街も樹も草も……すべての人を焼き尽くし
地底深く棲息する虻蛄も土竜も蚯蚓さえも黒焦げにし
ヒロシマは全滅した
続いて あの 祈りの街ナガサキまでも

殺されず生き残った人々は 戦いはもう懲り懲りだった
國のためとか世界のためとか考えることは
止めようとさえした

中でも元凶は原子爆弾

張本人は地上から抹殺しなければならぬ
何が何でも彼奴を二度と使ってはならぬ
いや ニッポンでの二度だけで懲りねばならぬ
心ある人々は

あの怖ろしさの権化の魔絶に立ち上がった

ところが

そんなねがいの人ばかりではなかったのだ
あんなにも瞬時に人も街も自然も焼き尽くす

威力のあるものが他にあるうか

あいつを我が物にして 我らの思いのまま操れたなら
人類はもつと幸せになれるはず
何としてでも我が腕に抱え込んでみようではないか
それらの人々は寄ると触ると声高に喧伝した
われわれ自身でよりよい幸せと

バラ色の糧食を勝ち取るために
主張者たちは人類最高の叡智と称して
多くの頭脳を集結し

その光線と熱線を封じ込め小出しに使い始めた
土中深く埋め込み 大量の水をぶっかけ海に流し
天の岩戸に見紛う建屋の奥深く押し込めて
隙あらば空中に出ようとすると太陽の欠片を

牢獄に繋ぎ止め

発散する 熱を 光を

昼夜の別なく まとめて送り出し

家々の部屋という部屋 野外の隅々までも光を振りまき
冷えた手足を熱源に温めて

冬を夏に 闇を昼間に置き換えることに成功したと
嘯いた

配信された夢は全世界を飛び回り

家々は昼夜を隔てる黄泉平坂を蹴破り

工場は毀れんばかりに稼働した

人類二千年の文明を 僅か一日で獲得できたと

世界は賞讃し数多くの勲章が配られた

最高神にも擬えられる光線は空中を恋うることもなく
人類の続く限りは何事もなく存続していくものと
信じさせられた

ヒトの寿命の長さはおろか

宇宙史よりも長く 格納され 管理され

ゼツタイの外には出ない はずだった

少なくとも数百万年間はそこに留まっていた

太陽の代替役をさせるのだと

建屋の主等は豪語していた

その者たちにはこれまでに受け取ったこともない高額の紙幣

の山が眼前に積み上げられ

その地位はその山の幾層倍も高まり

風評は海を襲う津波の如く津々浦々にまでも拡がって 行つた

あの日――

大地が揺れた

これしきの揺れは地震列島には有り勝ちだった
識者たちはこれ以上は無いつつも断言していた が
地が揺れば波も揺れる

津波の予想も出来ていた 大津波の襲来も考えていた
その対策の防潮堤で街は守られるはずだった

だが――今度の揺れは想定の外であった

あらゆる知見学識を総動員した中に

こいつだけは動員していなかった

建屋は流れ 全ての建造物は流され
多くの人が悲しみの極地で死んだ
いずれ人は必ず死ぬにしても
これは余りにも悲惨の極みではないか
想定外 想定外で 人々が亡くなっていた
いうまでもなく

大津波のことは致し方ない事なのかも知れなかった
かつてはたった一つでしかなかった大陸を
五つも六つにも引き千切ったのは

他ならぬ地球だったのだから また

地上一面を大森林で覆い尽くすかと思えば

其奴を地下に埋め込んで黒い石の燃料に変化させたり

石を搾って油にしたり 恐竜たちでさえ

瞬時に絶滅させた

地球の威力であつてみれば

津波を発生させることなどお茶の子さいさいの

ことだろう

ただそのことを忘れていた人類がいたに過ぎない出来事だっ

ただろうから

地球がやるのなら仕方はない でも

原子を爆弾に変えたのは人類のしわざ

その爆弾を懼れげもなく人殺しに使つたのも人類

其奴で殺されたものも人類

しかもその人類の代表を自認するヤマトの種族
利用しようと企んだのもヤマトの同じ人類だったのだ
いやというほど知り抜いていたヤマトの人が
押し込めようとはかったものの正体は他ならぬ
「あの太陽」だったのだ

生き残ったもの共はどうするだろうか？
どのように防潮堤を築き
どんな建屋を 何処に建てれば
何処からの水を溜め込んだ中に
太陽を封じ込められるだろうか

ヤマト族たちよ 八百万の神々をかき集め
あの太陽を囲い込もうと企てても
ヒトの身では出来る訳はない
天の岩戸が欲しいなら
アマテラス自らがのぞまない限り断じて不可能なのだ

ぼくらは裸に戻るべきではないか
掌に何ひとつ握ってなかった頃の
体に糸屑いっぽん纏わなかった頃の
生まれたまんまの姿に戻らねばならぬのではないか
大地から噴出したマグマが冷えて
自然のままにできた洞あなに棲み
落雷に分けてもらった火種の囲炉裏を囲み

わが穴倉に飾って暮らそうではないか

*1・黄泉平坂Ⅱあの世とこの世の境界にあるという坂
*2・オゴロⅡモグラのこと

(拍手)

佐相憲一（司会） 山本衛さん、ありがとうございます。落語の才能をお持ちの、大変楽しく鋭いスピーチと、切実な詩朗読でした。

さて、今回のアンソロジーは、これまでのお話や朗読にあつたように、震災や原発のことも大きくあるんですけども、今の厳しい世の中ですね、柔らかい心でもう一度命を見つめ直すという、とても優しい感性の詩もたくさん収録されています。先ほど中村純さんのお話で母さんの視点が述べられましたけれども、次にご登場の星乃真呂夢さんの詩は第七章「レクイエム」に収録されています。母親が亡くなるのを見つめる中に、新しい赤ちゃんの命が誕生してくるのを重ねて見るという大変深い作品で、私はこのアンソロジー全体の中でも特にすぐれた詩じゃないかなと思っています。では、星乃真呂夢さん、よろしくお願いします。

星乃真呂夢 はじめまして。初めてお目にかかる方も多いと思います。詩は、郡山直先生や結城文先生のいらっしやる英詩の会と、英語と日本語の両方で書くような活動をしています。

焚き火の上に互いの小手を翳し合いながら
毎日 律儀に昇ってくる本物の太陽の熱と光で
腹にはせいぜい小さな獣や小魚を口からおさめ
今ある胃袋に収まるだけの穀物にいのちをもらい
心はずませてくれる猿酒をいのりながら喉を潤し
道具と名のつく道具を貝塚に埋めて
真つ裸で妻と抱き合い子を育てよう
肉体に余る異性を欲しがり
一人では到底行けもしない
海の彼方までも渡りたがり
他人を見下ろす高台の椅子に腰をかけようなどは
もうやめようではないか

行き着いてみてそのさきなんになるといふのだろうか

ぼくらはみんなしてかえろうではないか
まだ齧歯類の仲間でさえなかった白亜紀に
リスやウサギやモグラにさえ追い回されていた
あの世界に

いつからヒトは宇宙の中心で最高最大の権力者だなどと
居丈高に居直る術を恥ずかしげもなく振る舞うように なる
たのか

生きとし生けるものどもが
生まれたままの姿で生きる生にひれ伏して
彼らの総代であるオゴロのアイコンを

この詩も、最初日本語で書いて、その後で英語で書いたものが、郡山さんなどが参加する「ポエトリー・ニッポン」というところに掲載されることになったものです。大震災の前の二月二十八日頃にできあがって、コールサック社に送った後に震災が起きて、しめきりが延びたんですけども、この詩を載せていただくことにしました。母は私に文学というものを教えてくれた人でした。詩を書く方というのは皆さん、心に花を咲かせることが上手な方々だと思うんですね。母は苦労した人生の中で、日常に小さな花を咲かせることが文学の心だということを教えてくれました。今日はベレー帽なんかかぶって来ちゃったんですけども、これは母が好きな色でして、自分が十代の時にこれと同じ色のセーターを着ていたんですね。母はいろんなものを処分していたんですけど、これと同じ色のセーターだけは亡くなるまで箆笥の中にとずっと持っていて、好きな色だと言っていました。日本画とかも若い頃は時々描いていた母なので、美とか、芸術を愛する心を教えてくれた母でした。川柳も書いています。母の川柳のグループは山梨県だったんですが、中沢春雨さんという大先生がいます。川柳に滑稽味じゃなくて、俳句と同じ芸術性をもたせるといふ運動をされた方で、素晴らしい川柳をいっぱいおこしました。季節をつけないで、薰り高い作品を五七五でつくれないか、ということをやっておられました。母もいろいろ書いて、山梨県で小さな賞をいただいたんですけども、亡くなった時に新聞が三行ぐらいで扱ってくださいました。原点になることを教えてくれた母でした。その母が突然七十代の中盤くらいに、郷里の山梨に帰った

時に、「これから本物の詩人はアスファルトをいつかひっぱがすね」って言ったんですね。私はこの言葉を今でも思い出すんですが、「いつかたくさんの詩人たちがアスファルトをひっぱがす日が来るよ」って言ったんですね。原発以上にたくさんある、このアスファルト。アスファルトを引っぱがす、それは政治家の力なんじゃなくて詩人の力なんだよ、と。

雪の扉 ―母へ まだ見ぬいのちへ 星乃 真呂夢

老いに しずかに雪の降る……

そうして

幾千の雪の扉をあけて

しろいひかりを帯びて

母の「時の門」は ゆつくりと 閉じられた

逝きながら 透き通り

休息してゆく 母のいのち

母の生きた 戦中 戦後の混乱

都会から 寒村への嫁入り

三男一女の子育て

それから それから……

雪は 何度も 降りつみ

語られぬまま閉じられた 母の物語が

いま しずかに横たわっている

棺の中で ようよう*

ほの明るくなってゆく 母の顔に
なおも 降りつむ 見えない雪よ

たくさんのあきらめや

たくさんの無念も

しろく しろく

みんな しろく

いのちの最期の宴のように

雪は 降りつみ

ほこらしげに

香るように

母は 眠っている

しろい人の仲間になって

光に満ちた少女の頃に もう 還りはじめているらしい

母は 古典のころを持つ人だった

歌を詠み 花鳥の画を 描いた

母の逝った夏

愛した京都 大文字の炎を 拝んだ

盆送りの その宵

人のたましいに 夏の雪は降りつみ

忘れ去られた 千年の恋も 万年のいくさも

しろく しろくなつていく

大文字の炎の中

――みえない雪が

たくさんの炎を 赦している――

逝った人の いのちに 雪が降り

幾千のいのちの 見果てぬ夢に

雪は降りしきる 祈りのかたちのように

雪 ふんわりと柔らかいもの

その澄んだ明るさ

高みからわきあがる しろい限りないものに

包まれていく やすらぎ

母のように なつかしく 透き通った尊いもの

もし 千年のかなしみに届き

万年の嗚咽に響く 雪を

降らせることができたなら

私たちは ゆつくりと すべての傷をいやし

赦し合うことが できるかもしれない

母と その母たちのように

雪の水の冷たさの中で

私は 信ずる

今日もどこかで 新しい母となる娘が 決意することを

どんなに荒れ果てた景色の前に いまは立とうと

勇気を持って いのちを産み落とすことを

母も その母たちも そうしたように

*ようよう……古語で「次第に、だんだんと」

(拍手)

佐相憲一(司会) 星乃真呂夢さん、ありがとうございました。

しみじみと聴かせていただきました。震災前に書かれた詩ですけれども、このような詩も被災地の人々の心に響くのではないのでしょうか。

さて、やはり柔らかい詩を書かれていて、柔らかい言葉の中に言っていることは鋭いという、井上優さんをご紹介します。井上さんは最近、『厚い手のひら』という詩集を出されました。今日は、この詩集の中に出てくる奥様の真由美さんと息子さんのシオンちゃんもお見えです。私はこの詩集の解説を書かせていただいたんですけれども、いま大変注目されているさわやかな詩集です。震災・原発のことも書かれています。ご自分で群馬を中心に本屋をまわられてですね、たくさん置いてもらっているという行動派です。井上優さん、よろしくお願いします。

井上優 こんにちは、井上優です。福島にボランティアに行つて、子どもを逃がす必要を感じまして、いまガイガーカウンターを被災地に送ろうという運動をしています。自分の住んでいる群馬県みなかみ町もホットスポットという放射能だまりになってしまいました。息子と妻を実家に逃がして、放射能だまりのみなかみに一人暮らしをしています。手作りの絵本を今日もってまいりまして、これの売り上げの何割かをガイガーカウンターの購入にあてようと思つています。ご協力いただければ大変感謝いたします。読ませていただく詩ですが、『命が危ない 311人詩集』に載せた後にさらに推敲を加えまして、今日は私の詩集に載せたバージョンで朗読させていただきます。よろしく願いいたします。

子供たちは知っている
子供たちが咲いている

地球の匂い

シオンの匂いは ミルクとおっぱいで
少しイチゴが まぎっている
きつとこれが 天国の匂いなんだろうな

*

まだ幼い海に守られた地方の 子供達は
日に日に 目覚めてゆく
見えるものに そして見えないものに
一枚ずつ 柔らかな和紙をめくるように

子供たちは
おぼつかない 足どりで
両手を広げて 勇気を持って
それでも歩みだす

咲いている 井上 優

花が咲いている

ランドセルを背負つて

手をつないで

手をつないで 笑いあつて

放射能の雨の中 黄色い傘をさして

こんなに腐敗した 精神こころの土壤に

闇が体内にまで 忍び込む世界に

子供たちが咲いている

サンタクロースを信じるように

子供たちは両手を広げて

空を仰ぎ 抱きしめている

大人が忘れてしまった

見えないものを

見えない よいものを

きつとこれが 本当の匂いなんだろうな

まゆみはシオンに キスをして

「あなたといると 生きている意味が わかるのよ」

と やさしく かたりかける

(拍手)

佐相憲一(司会) 井上優さん、ありがとうございます。

次は日高のぼるさんです。日高さんはこういった会にいつも来ていただきまして、原水爆をなくす運動をずっと続けておられます。個人誌「風(ふう)」というのを出版されていて、御夫婦で詩を書かれています。日高のぼるさん、よろしくお願います。

日高のぼる こんにちは、日高のぼると申します。私は社会に何かが起きると書かずにはいられないという強迫観念に襲われます。震災後、四篇の詩を書いて、それを繋ぎ合わせた詩です。私は生まれが北海道の類似というまちで、非常に地震の多いところ。十勝沖地震とかで、それから津波も多くあつて、ただ海の構造がちよつと違うので、深い海なので、一キロ二キロ先まで潮はひくんですけれども、本当にゆっくり戻ってくるのを見ていた、という記憶があります。一九六八年は高校生でし

た。それで、今回の地震は、お茶の水の湯島に事務所があるもの
のですから、金曜日でどうしようかなと思っただんですが、家が
埼玉の上尾市というところで、その時、女房と連絡がとれない
ものですから、夕方の六時過ぎぐらゐまで逡巡していたんです
けれども、歩いて帰りました。七時少し前に出て、上尾の駅に
着いたのが午前二時過ぎです。七時間二十分くらいを歩いてで
すね、だいたい四十二キロを歩いたことになりました。中山道で
すか、この白山通りですね、わかるかなと思っただんですけれど
も、全然そんな心配いらないです。歩けないくらい、渋滞する
くらい、たくさんの方が埼玉まで歩きました。そういう体験の
中で、三月十一日の日常を忘れないために書いたものです。

鳥の影 日高 のぼる

安全 安全と
オウム返しにくりかえされてきた「安全」が
神話となって

巨大な始祖鳥の残影が
無人と化した瓦礫の街を
覆っている

二〇一一年三月十一日 金曜日 晴れ
降水確率三〇% 予想最高気温十一度 最低気温二度

思わず胸がつまり
ありがとうの言葉を飲み込んでいた
男の子がかけよってくる
握りしめていた手を募金箱のなかで開き
ありがとうと声をかけるとほっこりと笑い
またかけていく 五円玉が入っていた

居酒屋のカウンター
いつもの顔が座り 少し大きな声で話し始めた
駅前のコンビニへ買物にいったら
金髪で顔のあちこちにピアスをしている
いま風の男の子 ATMで金を下ろし
備え付けの募金箱へ札をねじ込み
そのまま出て行った
店員が調べたら五万円
いまどきの子も格好だけじゃわからないなあ
みんな静かにグラスを傾けていた

*
津波に飲み込まれ
流されていく家や車

流される車のクラクションを鳴らし続けていた人
手をふる人もいました*

朝刊には「君が代処分取り消し 都教職員百六十七人
逆転勝訴」の高裁判決記事が躍った
「沖縄県民はゆすりの名人」などと発言した
米国務省のメア日本部長は更迭
寒さは少しやわらぎ過ぎしやすい日だった
午後二時四十五分までは――

週末のけだるい空気はその一分後に一変した
耐震構造のビル全体が大きく揺れ
いったん治まっても次つぎにくる余震
東京はもとより東日本全体の日常が変わった
宮城県沖 マグニチュード九・〇の巨大地震
手の施しようのない揺れと津波

福島第一原発の崩壊 全炉心溶融―メルトダウン
破壊された「安全」を「想定外」と言い換え
あとだしジャンケンのような政府と東京電力の対応

日本列島 いのちが漂流している

*
東日本大震災被災者への救援募金 駅前で訴えた
行き過ぎて戻り募金していく人
子どもたちから お坊さんやサラリーマンまで
小銭から千円札まで入れられる

生の最後の一瞬を
確かに生きてきた証を
伝えたかったのだ
なにか言いたかったのだろう その声も
波の間に消えた

かけがえない命を偲び
失われた街並みの上へ
花を手向ける

*宮城県南三陸町 被災者の証言―テレビ映像から

(拍手)
佐相憲一(司会) 日高のぼるさん、ありがとうございます。
続きまして、酒木裕次郎さんに読んでいただきます。酒木さ
んは昨年、コールサックから詩集を出されました。関東でも、
特に茨城は被災地ですよね。茨城からお見えになりました。酒
木裕次郎さん、よろしくお願ひします。

酒木裕次郎 ご紹介いただきました酒木裕次郎です。東日本大
震災を機に、記録文学の傑作と言われています、文庫文庫から
出ていますが、吉村昭の『三陸海岸大津波』というのがありま
して、それを三回くらい読み直しまして、すごいショックで、

その結果生まれた詩を、鹿児島県詩人協会の今度十二月に出るんですけれどもその詩集に載せました。それで、どうしても現場を見てみたいなということ、仙台に参りまして、それから岩手県にもバスツアーで、船にも乗って、行って参りまして、現場を見て本当に気持ちひとつにできたなという気持ちでいま現在もいます。

東日本大震災（東北関東太平洋沖巨大地震）

酒木 裕次郎

東日本に巨大地震が襲ってきた。

まだ余震がきている。

我が家もかなりの被災だ。

大津波が美しい漁港の街並を呑みこんでいる。

世界的にも名の知れた気仙沼漁港を襲っている。

最初は小川の流れるような津波の爪が、

深海の底からわき起こり、

人間が汚した

海底に沈んだ黒い汚泥を巻き上げて、

大津波に姿を変えて、

人間のいる陸地を、大地を、

魔物と化して襲う。

大津波が引いた後は、

黒い汚泥の廃墟の更地があるばかり。

太平洋の海岸沿いは、十^{キロ}の防波堤を築いている。

大津波はその防波堤を乗り越え、

漁船を海から引きずりおろして、

陸地を浸水していく。

海水を人間が汚した黒い汚泥で染めて、

漁船、車、民家、ありとあらゆる建物を呑みこみ、

人間の住んでいる街の奥座敷まで裸足であがりこむ。

一〇〇〇年に一度という大津波は、

巨大地震発生後

九分で襲ってきた。

この暴虐を命じたのはだれだ。

青森八戸。大湊。岩手宮古。釜石。大船渡。

宮城石巻。塩釜。仙台。

なぜ。なぜ。なぜだ。

福島南相馬。いわき。茨城大洗。水戸。

森進一の演歌に唄われる港町が、

いま恨み節の地獄にさらされている。

*地震古文書集『大日本地震史料』によると、東北から千葉にかけての海岸に、『三代実録』に記された貞観津波（八六九年）に近い巨大津波は、千年に一度ではなく四〇〇年に一度は来ていた可能性があるとされている。

できなかった。

生老病死

阪神・淡路大震災で、被災した中学生位の兄弟がきたとき、

受付の忙しさに流されて、「頑張れよ！」のひと声、

かけて上げられなかったことを、

一生後悔するだろうと、

神戸市役所の役人が言っていた。

あれから十六年が経過している。

米国の職業軍人は、連戦連勝で、

自分は死なずに生き抜いてきたが、

「人間を殺すのは気持ちのいいものではない」

と述懐している。

みんな後悔ばかりしている。

今この人生は一度しかない。光陰矢のごとしという。

肉体は衰え老いて行く。

心は老いることなく永遠に続く。

天変地異で、人為的な戦争で、人は死に、

命あるものの命のつぎる日は、ひそかに訪れる。

いかに刻苦勉勵、奮闘努力を貫いても、

生老病死は、秦の始皇帝にして避けることは

そんななかで、天寿を全うする人。横死する人。

だれが如何なる異を唱えようと、

運、不運としか想えない。

聖人は横死せずという。

ならばその分岐点は、

人道に背かないことなのか。

後ろ指を指されない生き様を実行することか。

生も歓喜、死も歓喜という。

心が永遠に続いて行くものならば、

老いた肉体に別れを告げて、

新しい肉体で産まれてくる。

それが生きとし生きるものの定めなのか。

（拍手）

佐相憲一（司会） 酒木裕次郎さん、ありがとうございます。

いま読まれた酒木さんの詩を代表選手のような形で、この命ア
ンソロジーが地元茨城の新聞に紹介されました。

続きまして、たけうちようこさんをご紹介します。たけうち
さんはいつもコールサックにご理解いただきまして、この前、
鈴木比佐雄さんの分厚い詩論集が出ましたが、全部読んでいた
だいて、共感するという内容の詩を「コールサック」七十号に
寄せてくださいました。今日は、たけうちさんの妹さんもご来

場で、詩の中にも出てきます。これは、亡くなった詩人・鳴海英吉さんの詩をふまえた作品ということで読んでいただきます。たけうちようこさん、よろしくお願ひします。

たけうちよつこ 千葉県由市川から参りましたたけうちようこと申します。よろしくお願ひいたします。いまから先に読む鳴海英吉さんの詩は、この311人詩集には載っておりません。まずはこれを聴いてください。

きょうちくとう・八月 鳴海英吉

空襲で焼け出されて 横浜から千葉
その家に シベリヤから復員してきた
庭に きょうちくとうが 咲いていた

ただいまって 言ったら
あと 何も言うことがない
仕方がないから おれの本はと聞くと
遺品と書かれた ミカン箱が置かれる

茶色の 改造社文庫
レーニン主義の基礎 昭和七年発行
生き抜いた 涙は出さないが泣いた

したかのように体のどこかが鈍い音を聴いた
いつきに六十六年前 あの日 八月十五日
南伊豆で暮らした風景が 動きはじめた
父はサイパンで戦死 つづいて
母は結核で血を吐いて 吐いて死んでいった

あの日も八月 夾竹桃が咲いていた
私は五才 妹は三才

鳴海英吉の詩「きょうちくとう・八月」に 出会った

二〇一一年正月
私の中の夾竹桃は 萎んだが
暑かった あの日の記憶は 去らない
去る日は来ない

この詩の中で、私は当時五歳、妹は三歳でした。先ほど、浅見洋子さんの詩の中に「孤児たち」というのがあります。けれども、まさしく私も妹も孤児、その後もずっと力を合わせて、それぞれ別のところに住んでいますけれども、生きてきました。今日は妹のところに泊りして、市川に帰ります。鈴木さん、佐相さん、皆さん、今日はありがとうございました。

(拍手)

ちーん 鐘の音がするから
ふりむくと 押し入れの中に 仏壇
鮮やかな桃色 きょうちくとう一輪と
おれの 位牌があった

鳴海英吉という詩人のことは知ってはいましたが、「きょうちくとう・八月」という作品は、「コールサック」六十八号で初めて目にいたしました(山岡和範氏がとりあげて朗読したものの)。そして、私の父を戦争で亡くしたことを思い出し、泣いてしまいました。私はいまから六年前の二〇〇五年に、先ほどの日高のぼるさんの上尾と同じ埼玉の北本というところから千葉の市川に移り住みまして、鳴海英吉さんも一九四七年から十一年間、市川に在住されていたことを知りました。それからもうひとつ、二〇〇九年九月十六日、市川市文学プラザで、鈴木比佐雄さんの講演「戦後詩を切り拓いた市川の詩人たち」を聴かせていただいたことで、コールサック社を知り、しばらく書けなかった詩が書けるようになりました。

遠い日の夾竹桃 たけうち ようこ

その日は 二〇一一年正月
鳴海英吉の詩「きょうちくとう・八月」に 出会った。が、
ンと耳の奥のおくで
錆びた鈍い音がしたか……

佐相憲一(司会) たけうちようこさん、そして妹さん、ありがとうございました。詩を書く初心のようなものを受け取って、こちらにも新たな気持ちになります。

さて、続きまして、今年話題の詩集『耳の眠り』を出されました尾内達也さんです。この新詩集はいま大変好評です。コールサックのこういつた集まりにいつも参加してください。鳴海英吉の詩も読みこんでおられますし、詩とともに俳句も実践されています。ロシア出身フランス在住の詩人・ヴァレリー・アフアナシエフさんの詩の翻訳も発表されています。では、尾内達也さん、よろしくお願ひします。

尾内達也 尾内です、こんにちは。先ほど、星乃真呂夢さんがアスファルトをはがす運動が詩人の間で起きるんじゃないかというお話をされましたが、非常にそれ私、印象的で、実はそういう動きが実際いまあるんですね。それはウェブ上でありまして、フェイスブックのですね、「全国アスファルトをはがそう連盟」というのが動いているんですね。実際にアスファルトをはがすというところまではまだ行っていませんけれども、運動の広がりとしてはヨーロッパの方々や、ヨーロッパ在住の日本人の方々ですね、韓国や中国在住の日本人の方々、そういった方々がですね、フェイスブック上でですね、写真のやりとりを主にやって、意見の交換をしていると、私もたまたまそれを知って面白いと思って参加させていたたいたんですね。原発とも、これは深いところで関係があると思うんですね。原発というのは近代の文明と深い関わりがあつて、アスファルトで地

球を覆うといひのもやっぱりそれと同じ発想にあると思うんですね。それをがしちやおうということなんで、脱原発と非常に近いんじゃないかと思ひます。私はホットスポットの松戸市に住んでおりまして、二十三歳の子がいるんですけども、次の世代のことを考えるとですね、非常に不安ですよ。これもがホットスポットの中でずつと生まれ育つていくというようなことを考えると、遺伝子に何か影響があるんじゃないかと思ひざるをえないわけです。非常に、怒りがあります。ほくはデモとかはあんまり積極的に参加する方ではないんですが、今回のことに関しては怒りを覚えまして、九・三の柏デモ、反原発ですね、約百人参加しました。九・一の千葉デモ、これがだいたひ百五十人ぐらい参加しました。それから、大江健三郎さんや鎌田慧さん等々の著名人が参加した九月十九日の明治公園デモ、六万人でしたが、それにも参加しまして、ちよつと面白いことがあつたんですね。青山通りをデモ行進してましたら、小太りの中年の男性の方がですね、デモ隊の横をばあつと走つて行つて、掛け声をかけて行つたんですね。「さんざん電氣の無駄使いしやがつて、お前ら何やつてんだあ」というような声なんです。デモ隊の方々はみんな笑つて過ごしたんですけども、ちよつと考えさせられるなあと思ひました。つい最近も飲み屋ですね、ほくも悪酔いしちゃつて、議論してけんかになつちやつたんですけども、けんかした相手が言つたことはですね、「我々にも責任がある」と。電氣の無駄遣いしているじゃないか、というふうなことでした。私はこの二つのことから、正直言つと、違和感を感じるんですね。知らないうちに

小さな丘

生き残つた者は

死者を探してさまよう

死者は日本の歴史 富士 北斎

老人は語つた「そこらじゅう探したが
みつからなかつたよ」

死者はあまねく存在し

だれもが死者である

光源氏 バツハ シェイクスピア

夜の太陽 尾内 達也

原発事故でキャンセルが相次ぐ中、来日した三人のアーティスト
と死者に

コンサートホール

すべてのドアは開かれ

すべての窓は開け放たれた

夜の太陽の下で

非在の中で

聴いている耳がある

五十四基、原発ができていたというのが現実だと思ひます。電氣無駄使いするつていつてもですね、したくてしているわけでは必ずしもないですよ。つまり、させるような仕組みとかですね、社会のあり方とかですね、文明のあり方つていうのを抜きにしてですね、個人の責任に全部転嫁する話つていうのはすごい違和感があるんです。ですので、さっきのアスファルトの話と関係すると思ひますけれども、文明全体というふうな、そういう視点がすごく大事なんじゃないかなつて感じていますね。

詩の朗読を二篇させていただきます。はじめの詩はヴァレリー・アフアナシエフさんの詩です。ピアニストでもあり、旧ソ連出身で現在パリに在住してつておまして、四月に来日してくれたんですね。震災から一カ月経つていない頃ですね、ほとんどのアーティストたちがびびつちやつて、来日をキャンセルするつていう状況の中で、勇気をもつて来日してくれたんです。その時にメッセージを送つてきてくれたんですね。それをほくに訳してくれと言われましたので訳したのがいまから読みあげる詩です。その後の私の詩は、その時のコンサートに触発されて書いたものです。

日本に捧ぐ

ヴァレリー・アフアナシエフ

尾内 達也 訳

太平洋から五百メートルほどの

弦の上の地球を

鍵盤の上の宇宙を

あの時

あの場所

あの愛は

そのままに

夜の太陽の下

(拍手)

佐相憲一(司会) 尾内達也さん、ありがとうございました。

続きまして、来年のアンソロジーに関わつてくださる方をご紹介します。今日のプログラムの中に緑色の紙が入つていてと思います。『脱原発・自然エネルギー二〇〇人詩集』の公募の紙ですけれども、ここに載つていらっしゃる方々です。まずは、翻訳してくださる詩人の結城文さんです。今日はご友人のオランダからはるばるいらつしやつたモーレンカンブふゆこさんもごいっしょです。では、結城文さん、よろしくお願ひします。

結城文 結城文でございます。私は今年のお彼岸の時に二泊三日で被災地をまわつてきました。私の父は石巻の出身で、昭和二十年の終戦の一カ月前ぐらいに戦死しました。その頃、私たちは東京で焼け出されたりして、戦後しばらく経つたときに、お葬式が自分たちでできないので、本家に頼んで石巻で葬式を

出してもらいました。やはり、父の育ったのは石巻ですし、先祖代々いるのは安らぐのではないか。そういう思いで、今度の津波の時に、大変申し訳ないけれども、一番最初に思ったことは、「父の墓はどうなつたんだろう」ということでした。でも、生きている人の安否すらわからない時に、もう亡くなって眠りについて人のお墓のことを聞くなんてことはとてもできないので、我慢していたんですけれども、三月末ぐらいになって、電話をかけてみました。すると、この地域の電話は通じません。四月の二十日くらいだったでしょうか、お寺に直接かけました。そうしたら、そのお寺は、津波で山門から本堂まで腰ぐらいまでの津波がきたと。本堂の前までは、ヘドロとガレキがいっぱいです。それは片付けられたんですけれども、本堂の後ろに墓地があります。ヘドロでもって墓地までなかなか行けません、という話でした。私の娘がちょうどそちらの被災地に行く用事がありましたので、時間があつたら見てきてほしいと頼みました。そうしましたら、お墓はちゃんとあつたけれども、四十五度ぐらいそっぽ向いている、と言われまして、そこに男性が四人くらいいたので直すようにやってもらつたんだけれども、重くて動かなかつた、ということでした。その後、近所の親族とも連絡がついて、お彼岸に行きました。被災地は車がなければ行けないので、東京の青年で、落語の師匠を連れて被災地をまわっているというボランティアの青年の車に乗せてもらいました。一ノ関まで新幹線で行って、そこから海の方へ出て、気仙沼に行つて、それからずっと石巻まで下りました。被災地の何とも言えないその状況が、ヒロシマ・ナガサキのあ

ウランという一度火をつけたら
永遠に燃え続ける元素に点火した
人間のおごり――

水道水が 野菜が 果物が 魚が 牛乳が
否

自分たちの吸う空気さえも放射能に汚染された――
今までにだって
公表されなかつた原発事故はあつたかもしれない
今までにだって
公表されなかつた放射能汚染があつたかもしれない

人の命が危ない！
動物の命が危ない！
植物の命が危ない！
目に見えない放射能による生命体への損傷――
人間は核燃料という
巨大魔神をおこしてしまつた

核燃料によらないエネルギーを――
生命体に無害なエネルギーを――
人間が定めた安全の基準が
脆くも崩れ去つた3・11
原発の耐震対策が

の写真、焼け野原になつた東京の写真、それらと非常に似ていると、私はびつくりしました。気仙沼で明治の頃に起きた津波では男の子がさらわれたそうです。そして、柳田國男が民話を取材したという石碑が建っていました。陸前高田というまちに行つたんですが、もう本当に何にもないんですよ。高台にあるお寺から見下ろせるんですね。本堂にはいっぱい、白木とかお骨を入れた箱などが置いてありましたね。女川では病院が高い丘の上に立っていて、そこ一階まで水が来たんだということでした。津波の高さに私はりつ然としました。民家なんてのもう何も残っていないんです。それで、石巻に着いて、いとこの家が大丈夫だったんで、泊めてもらいました。

今日読む詩は、津波の被害というより、そこから発生した、どちらかと言うと福島に焦点の行っている作品です。

3・11 結城 文

3月11日2時46分

人間のおごりにたいする警鐘のように

東日本に

地震がおこつた

津波が襲つた

福島原発の重大事故は
核燃料廃絶への警鐘――

完全にうちのめされてしまつた3・11
原子力平和利用の神話が
脆くも崩れ去つた3・11

(拍手)

続きまして、今日、モーレンキャンプふゆこさんをお連れしましたので、ご紹介します。オランダにお住まいです。二週間のご予定で日本にいらつしゃいました。お生まれは東京で、愛知県の大学を卒業になりました。私は短歌の国際化のための「短歌ジャーナル」という雑誌の編集をしております。この雑誌は日本歌人クラブの機関誌で、もう二十年くらい継続しております。郡山直先生もこの中に定期的に書いていただいております。モーレンキャンプふゆこさんとはそんなわけでお会いしました。歌集もお出しになりました。彼女は俳句もなさいますし、詩もお書きになります。エッセイもとても上手に書かれております。オランダが第二の母国になりまして、結婚され、お子さんもお二人おられます。

モーレンキャンプふゆこ はじめまして。今日はお招きありがとうございます。ご紹介しました。今回の訪日は母校で講演をしてくれということとで、「日本の詩歌の魅力」という講演をいたしました。すべて終わりました、いまほっとしているところでございます。今回の大震災、そして福島の悲劇、心よりお見舞い申し上げます。

オランダは九州ほどの国でございます。チェルノブイリの後、国をあげて原発に反対と、エネルギー対策を方向展開いたしました。それで、いま原発は一基、約三・八パーセントになっているそうです。チェルノブイリの時に書いた短歌がございます。

目に見えぬ 放射能の雨降れば 英知も無知も 濡れて悲し
き
核をうむ 心は核でも減はずと 知りてなお投げむ 一か
いの詩

このような騒然とした世界で、詩の力がどれほどの意味をもつかわかりません。しかし、一行の詩が人生を変えることができるように、一篇の詩が新しい世界への引き金となることを祈ってやみません。皆様のご活躍を心よりお祈り申し上げます。

(持参詩朗読)

(拍手)

佐相憲一(司会) 結城文さん、モーレンキャンプふゆこさん
ありがとうございます。いまの世界で詩を書くことの大切さが伝わってきました。

続きまして、今日はお体の調子が悪い中を来てくださいました鈴木文子さんです。次のアンソロジーの編者をつとめていただきます。鈴木文子さん、よろしくお願いします。

ましたが、その時に黒人も使われておりまして、当時の黒人は日本人が十分くらい働いて被曝基準通りに書かせられた、そして黒人は二十分、二十五分、日本人以上の放射能を浴びて、すぐに国へ返された、いつ亡くなったかわからない労働者がいたわけです。私は当時組合の運動をやっておりまして、原発反対の運動もやっておりまして、怒りを感じて書いたわけなんですけれども、その労働者は、いま問題になっている福島浪江町と双葉町と大熊町と三人の労働者だったわけです。

今度の311人詩集にも書かせていただくことになったわけですが、人間というのはやっぱりその時期が過ぎると、今年三月十一日に大変な震災があった、あんなに大変な原発事故があった、亡くなった方もたくさんいるというのはみんなの記憶に残っているんですけれども、何月何日に何人亡くなった、メルトダウンが起きたのはいつなのかということをきちっと記憶しておかなければ、長い間経つと忘れてしまうんだなという感じで、この作品を書きました。いまでも行方不明者が三六〇人以上おります。それを新聞でいまでも切り抜いて一覧表にしております。今日は何人亡くなって、何人見つかったんだというのが記録に残っていきます。それも含めて、これから私は労働者として書いていく責任があるんじゃないかと思っております。三十年も前に原発の詩を書きながら、その後私は何をしてきたかと言えば、私も明るい安全神話に乗せられて電気を無駄遣いしてきたんじゃないかなという忸怩たる思いがあります。自分で記録して、そして労働者の詩を書いていきたいなと思っております。

鈴木文子 こんにちは。鈴木文子です。風邪をひきまして、今日出席するために、昨日一日寝ておりました。佐相さんから電話やメールをいただきまして、寝ている間に佐相さんの顔がちらちら浮かびまして、また郡山直先生の楽しい踊りもごいっしょのできるので、今日やってまいりました。

私がいまご紹介いただきました新詩集の編者になるのにはエピソードがございます。実は三十年くらい前に、「夏を送る夜に―原発ジプシー逝く―」という詩を書いたことがあるんです。それをコールサック社の『鎮魂詩四〇四人集』で紹介していただいて、それが「東京新聞」の「大波小波」という欄で引用されました。その時に、それを見た「市民の意見」という団体、小田実さんなどがつくられたべ平連の方々がいまでも活躍されているようですが、その編集部から電話がありました。この詩を掲載させてほしいという話がありました。「古いですよ、三十年も前のですよ」と言ったら、いまのこの原発の事故にびったりなので掲載させてほしいということで、掲載されました。それは三千人以上の読者がいらつしやるそうで、あちこちから電話やファックスがあり、読んでほしいとか、使わせてほしいとか、いうことがありまして、詩は一人で歩くもんだなあという感じがしております。今年はおと二回くらいその原発ジプシーの詩を読むことになっているんですけれども、そういうことがきっかけで、この編者という恐ろしい役をやらなければならぬはめになりました。三十年前に原発で働かされた労働者たち、亡くなっていった労働者たちの気持ちを思っ

大震災被災者一覧 鈴木 文子

その日 いつもの朝だった
いつもの時が動き 家族で夕食を囲むはずだった
二〇一一年三月十一日 午後二時四六分
その時 M9・0 大津波 火災

ここに「大震災被災者一覧」がある
縦5cm 横3cm五mm 新聞の囲み記事に
納められた数字がいる

三月一二日 午後三時三六分 東京電力福島第一原発1号機 水素爆発
現場作業員一人被ばく・負傷
三月一二日 死者不明数千人
三月一四日 東京電力福島第一原発3号機 水素爆発
東京電力社長行方不明
三月一五日 東京電力福島第一原発2号機
圧力抑制室爆発 放射線濃度上昇
三月一五日 東京電力福島第一原発4号機
使用済核燃料プール爆発・火災

現場作業員 三キロ圏内被ばく一六〇人の記録はない

三月二一日 死者 八六四九人 不明 一三二六一人
三月二三日 死者 九四八七人 不明 一五六一七人
三月三二日 死者 一一五三二人 不明 一六四四一人

その時 から一カ月 東北地方は氷雨 午後強まる

四月一一日 死者 一三三三〇人 不明 一三七一八人
四月二一日 死者 一四一三三人 不明 一三三四六人
四月二三日 死者 一四二三八人 不明 一二二二八人
四月三〇日 死者 一四六六二人 不明 一一〇一九人

あの日 から二カ月 放射能汚染区域
雑食のハシブトガラスだけが群がっていた

五月一一日 死者 一四九八一人 不明 九八五三人
五月二一日 死者 一五一七〇人 不明 八八五七人
五月二七日 死者 一五二四七人 不明 八五九三人
五月二八日 死者 一五二五六人 不明 八五六五人
五月二九日 死者 一五二六九人 不明 八五二六人
五月三〇日 死者 一五二七〇人 不明 八四九九人
五月三一日 死者 一五二八一人 不明 八四九二人
死者 行方不明者の数字は続いて行く

死者は茶毘に付され

国民のため？ 被災者のため？ 大連立

ふざけるな！

※参考「東京新聞」

(拍手)

佐相憲一(司会) 鈴木文子さん、ありがとうございます。
その強いお気持ちで、ぜひごいっしょに来年アンソロジー編者
のほうも、よろしく願います。

続きまして、山田ようさんをご紹介します。今回第八章
「戦争と平和」のところに書かれています。山田ようさん、よ
ろしく願います。

山田よう こんにちは。生まれは群馬の前橋です。山形に
二十三年住みました。仙台にも住んで、現在は東京にいます。
途中一年半ほどモンゴルにも住んでいました。からっ風とい
うことで、上州は二月頃すごい風なんです。詩人がけっこう多
いんですけれども、なぜかっという、しゃべった言葉が風で
ほとんど短く切れてしまうそうです。それで詩人が多いと。私
が通いました女子高の校歌が高橋元吉という詩人の詞で、非常
にいい詩です。

前橋の夕日はとてもきれいで、オーストリアから帰ってきた
人が「前橋の夕日は一番きれいだ」と言っています。私の母も、

肉親や友人たちが二人一組になり
木の箸で左右から骨を挟むのが この国の習わし
家族に抱かれ 成仏できた人は何人いるだろう
原発の毒にまみれた 行方不明者は
わたしはここ。ここにいるよ。

呼びながら防護服の機動隊を待つて
待ちながら 傷みながら 臭っているだろう
「申し訳ありません。申し訳ありません。」
何が申し訳ないのか 開発途上のロボットには
まだデータの入力がないのだ

大震災被災者一覽

縦5cm 横3cm五mm 長方形の囲みに
まだまだ生きられた人たちが圧縮されている
△真の友は災難の時に知る▽

ロシアにはこんな諺があるという
今 被災地の人たちには真の友が見えているだろう
黙っているが 数字だって考えているのだ
慎ましかで控えめな国民性ではだめだと
はつきりもの言える人でなければだめだと
そして叫ぶのだ

数字を 新聞を踏みつけにするなど
被災者を 被災地を置き去りにするなど
今こそ大声で叫ぶのだ
人災はもう沢山！ すべての原発廃止！

ほら夕日がきれいだきれいだ見ると言っていました。

チエルノブイリ事故が起こった一年後にドイツ人がドイツで
原発事故が起こったと想定して書いた児童文学の「みえない
雲」というのをいま読んでおります。グードルン・パウゼヴァ
ングという作家です。非常にいまの状況と似ていると感じてい
ます。福島第一原発の四基の一基ずつの下にそれぞれ百トンず
つメルトダウンしていて、放射性物質がたまっていて、がんば
んにくいこんでいて、厚さ十メートルぐらいの鉄板で囲って遮
蔽しなければいけないのに、それをやっていないということ
聞いています。チエルノブイリ以上のことがいま起こってい
て、世界人類のすべての英知をもってこない、あれは解決で
きないそうです。でも、それは政府が言わないですね。こない
だ、私、九・一九も行きましかれど、大江健三郎さんがおっ
しゃっていたのは、集会とデモと署名を続けるしかないとい
うことでした。

で、詩なんですけれども、このミヨウバン先生というのは、
私が宮城で教育実習をした時にお世話になりました地学の先生
です。その後もごいっしょにしていた研究会で指導していただ
いたりしました。非常に教育熱心・研究熱心な先生のことを思い
出して書きました。

ミヨウバン先生

山田 よう

元日に ただ「九」とだけ書いた賀状が届く

ひたすら 解説

どうやら

憲法「九条」のことらしい

差出人は晦日に土に帰ってしまつた人

ミヨウバンの結晶の作り方を

ずーっと前に教えてくれた

優しかった先生

矢も楯もたまらず

正月 ミヨウバンを作つた

粉を秤量 湯水に溶かし

そーつと冷ます

種結晶をつり下げて

八面体の結晶が生まれた

紫色

静かに語りかけるような

光を放つ

粉雪舞う昼下がり

ひとりミヨウバンを見ていると

小さな結晶の向こう側から声がする

(いくさはきらい もうしない

へいわをあいする)

教壇のミヨウバン先生の

かつての だみ声

懐かしく せつない

だみ声

(拍手)

佐相憲一(司会) 山田ようさん、ありがとうございます。

憲法九条は、もう武力を使わないと誓つたものです。「命が危ない」にまさに直結します。

続きまして、中園直樹さんです。いじめの問題を書かれていきます。いじめ撲滅の行動もカナダと連帯して起こされています。小説家でもあります。中園直樹さん、よろしくお願いします。

中園直樹 よろしく願います。いま皆さんに配られているのは、「ピンクシャツデー」という運動のチラシです。ぼくは小学校三年から大学二年までいじめられていましたが、いじめと自殺をテーマに書いてきました。そういうことが「はやってる」からと、書いて逃げ去る人がものすごく多いんですね。それがこどもたちを殺している、無責任に人を殺すことを書いて、「何にもしてねえよ、俺」っていう人が多すぎるので、そういう人には腹が立つので、嫌なんです。今年二月までのぼくは、そういうものを書きながら、希望をもつてませんでした。何でかつていうと、そもそもぼくが書き始めたのは、たくさん本を読んだけどどの本も助けてくれなかつたのでぼくが書くしかなかつたんです。それはいまも続いているんです。だけど、

今年の二月にぼくはすごい希望に出会つたんです。それがこれ

(ピンクシャツのこと)なんです。

ピンクシャツデー

中園 直樹

二〇〇六年の日本では

いじめ自殺報道と自殺の連鎖が続いた

その十年ほど前にも同じことがあつたのに

二〇〇七年のカナダでは

ピンクのシャツの男子生徒がいじめられた

それを知つた上級生の男子生徒二人が

五十着ものピンクのシャツなどを買い

メールや掲示板で呼びかけた

翌日学校はピンクに染まり

学校からいじめが消えた

以降毎年二月最終週の水曜が

学校や職場にピンクの服を身につけて行く

ピンクシャツデーとしてカナダに定着

七十五カ国以上に広まつた

子供達から学んだ英語圏の人々は

人類共通のこの問題を何とかしようと

何よりも被害者の「命」を守るため

世界中へ広めようとしている

二〇一一年時点の日本では

未だほとんど知られてないけれど……

希望は ある！

ツイッターでもこの取り組みを宣伝しているんですけども、けっこうピンクシャツを買ってくださっている方がいます。ぼくはこの運動を印刷物に残さなければいけないと、いくつか書いています。今年二月に出版したぼくの詩集『しんかい動物園』の二刷りの「あとがき」にも入れました。というわけで、まだ、ピンクシャツデーのことを書いた本は数冊なので、この詩集『命が危ない』はぼくにとってとても大切です。

(拍手)

佐相憲一(司会) 中園直樹さん、ありがとうございます。

いじめ撲滅のピンクシャツの運動が日本でもっとひろがるといいですね。

さて、長時間にわたる熱心な記念会も、いよいよ詩の最後になりました。トリをつとめていただくのは、平井達也さんです。今年、『東京暮らし』という大変話題になつた詩集を出されました。現役の仕事世代の生活と、社会の中でどんなことがあるかというのを日常の言葉で書いた詩集というのは最近あま

り見かけません。大変貴重で面白い詩集です。今日、なぜこの方の詩が最後かと言いますと、中村純さん、原田勇男さんから切実な震災・原発のお話などをいただきましたし、スピーチ・朗読でもいまの社会問題の命に関わる切実な声をたくさんいただきましたが、その帰結として、身のまわりの人を大切にしたり、命をそもものところから見つめるところに戻つてくると思うのです。ですから、最後は、あえて何気ない日常の、近くの女性を好意をもって思いやる作品でしめたいと思うのです。平井さんの詩は第二章「仕事、世の中」に収録されています。では、平井達也さん、よろしくお願いいたします。

平井達也 はい。そういうことだったんですね。初めて知りました。今回参加した詩は「吸い殻」という詩ですけれども、まゆちゃんという知り合いの女性、二十四歳のまだ若い女性で、彼女のことを書いた詩です。彼女と出会ったのは五年くらい前ですが、水商売のお姉さんで、ぼくはそこへ行ったお客ということで知り合いました。その後、まゆちゃんは二、三軒店が変わったんですけれども、まゆちゃんはとつてもいい子なんで、私は彼女のいる店には必ず顔を出すことにしています。で、今年のはじめくらいに、まゆちゃんの体に異変が起きまして、若い人にはわりと出やすい症状だということ、しばらく様子を見ようということになったんです。通院しながら様子を見ていたんですけれども、その頃ですね、三・一一が起きまして、まゆちゃんも被災地のことを報道で見ながらすごく心を痛めていて、でも、自分は自分の生活でもういっばいいいっばいで、お金

変な細胞が見つかってねえ
手術しなきゃならないかも なの

タバコの煙が立ち込める店の
仕事しかしたことのない

まゆちゃんに
だんなさんができて
子どもができて と

そんな話をぼくとしていたのだけれど
子宮とつちやったら産めないのかなあ
お母さんのお腹借りて作れるのかなあ

タバコの火をもみ消すみたいに
ぼくたちは他愛のない会話を途切れさせて
タバコの空き箱をひねり潰すみたいに
ぼくはまゆちゃんを残して店を出る

深夜の街角には誰かのやけくそが
吸い殻の形に折れて落っこちている

(拍手)

佐相憲一(司会) 平井達也さん、ありがとうございました。

今日こちらには、石川県からはるばる来ていただいた、うお

を送ることはとてもできない、でも、着る物とか何か送りたいから、平井さん、どうしたらいいんだろうね、なんて話していたことを思い出します。で、夏になるちよつと前、やっぱ手術しなくちゃいけないっていう話になりました。七月に手術はうまくいって本当によかったです。しばらく休みを経まして、秋頃からまた、まゆちゃんは水商売やっています。今度は実家の近くのバーです。そのバーをやっているのはまゆちゃんの高校時代の同級生の男の子で、地元ですから、店に来るのはまゆちゃんの小学校時代の同級生だったり、高校の同級生だったり、そんな若い人たちがよく来ていて、私も月一回くらいは顔を出すようにしています。それで、若いお客さんたちとカウスターに並んで飲んでるわけですから、たまに言葉交わすんですけれども、みんなとても気持ちのいい若者たちです。先週末も顔を出してきました。まゆちゃんは「就職したいな」って言っていました。都立のわりと偏差値が低めの高校を卒業してから、ずっとまゆちゃん、バイトなんですよ。引越し屋と水商売しかしたことがない。そんなまゆちゃんの詩を書いたので、読みます。

吸い殻 平井 達也

まゆちゃんは中学から吸っていたタバコを
一日十五本まで減らした

ずみ千尋さんもいらっしやいます。目が不自由な中、ずっとコールサックを支えてくださっている詩人さんです。福島島の御出身です。うおずみさん、ありがとうございました。

(拍手)

今日は長時間になりましたが、それぞれ大変熱い思いがたっぷりあって、充実した集まりになったのではと思います。さて、最後の最後は、お待たせしました。コールサック名物の時間です。ミスター郡山ご登場、郡山直さんの喜界島踊りです。

(踊り)

郡山直 皆さん、こんにちは。

(郡山さんの踊りに合わせて、会場みんなで楽しい踊り)

ええ、最後に、三三七拍子をやりたいと思います。私は時々、世界詩人会議というのに行きますけれども、ディナー・パーティの後にですね、三三七拍子をやるんです。皆さんに手をとりたいもらいます。

(三三七拍子)

佐相憲一(司会) 郡山直さん、ありがとうございました。

(拍手)

また、今日素晴らしいお話をいただきました中村純さん、原田勇男さんに、もう一度皆さん、拍手をお願いいたします。

(拍手)

ご来場の皆さん、今日は本当にありがとうございました。これで終わります。(拍手)